

# 八日市場市大寺廃寺跡確認調査報告書

平成元年度

財団法人 千葉県文化財センター

## 序

千葉県には2万か所にのぼる多数の遺跡が所在していますが、その中で古代寺院跡は上総、下総の国分寺を始め約40か所確認されています。これらの寺院は、古代における地域の歴史、文化を解明する上で貴重なものが、学術的調査により規模、構造、年代等の把握された例は数少ないのが実状です。

このため、千葉県教育委員会では昭和55年度から国庫補助を受けて、古代寺院跡のうち重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしてきました。

今年度は、10か年継続事業の最終年度になりますが、八日市場市に所在する大寺廃寺跡の調査を実施しました。その結果、基壇の一部や掘立柱建物跡、蓮華文の軒先瓦を始めとする多量の布目瓦が検出され、奈良時代の寺院の内容が明らかになるという、大きな成果が得られました。

このたび、その成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術的資料として、また文化財の保護、活用のための資料として、広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、文化庁を始め、八日市場市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心からお礼申し上げます。

平成2年3月31日

千葉県教育庁文化課長 福田 誠

## 例　　言

1. 本書は、千葉県八日市場市大寺字助右エ門坂1,861ほかに所在する大寺庵寺跡の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている古代寺院跡確認調査の第10年次（最終年度）であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査は、平成元年10月2日から同年11月6日まで実施した。
4. 調査は、財団法人千葉県文化財センター研究部において、部長堀部昭夫、部長補佐渡辺智信の指導のもとに、班長谷　旬が担当した。
5. 本書の原稿執筆は谷　旬が行った。
6. 調査に当たっては、所有地の発掘を快く御承諾くださった林虎之助、山崎源蔵、小関喜三郎の各氏から多大の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
7. 現地調査から報告書執筆に至るまで、八日市場市教育委員会の関係者各位、地元大寺区の皆様のほか、下記の諸氏、機関から御教示、御指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである（敬称略）。

日色政治　福間元　県立房総風土記の丘

8. 本書では、国土地理院発行の1/50,000地形図（八日市場）及び八日市場市都市計画図（1/2,500）No.6・7を利用させていただいた。
9. 大寺庵寺跡の遺跡コードは、214-004・005（御堂跡）である。

## 目 次

### 序

### 例 言

I 遺跡の立地	7
1. 遺跡の位置	7
2. 周辺の歴史環境	7
II 調査の経過と方法	10
1. 調査の経過	10
2. 調査の方法と各区の状況	13
III 遺 構	16
1. 大寺廃寺跡	16
2. 御堂跡	24
IV 遺 物	28
1. 大寺廃寺跡	28
2. 御堂跡	39
V まとめ	40

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図.....	6
第2図 遺跡周辺地形図.....	8
第3図 大寺廃寺跡地形図.....	11
第4図 大寺廃寺跡遺構配置図.....	14
第5図 SB001・SB002遺構.....	17
第6図 SW001遺構 .....	19
第7図 SD001～SD003・SI001遺構 .....	21
第8図 SD005～SD007・SI001遺構 .....	23
第9図 SK001・SE001遺構 .....	23
第10図 御堂跡地形図.....	25
第11図 SB003・SD009・SF002遺構 .....	27
第12図 1区出土遺物.....	29
第13図 2区出土遺物（1）.....	29
第14図 2区出土遺物（2）.....	30
第15図 2区出土遺物（3）.....	31
第16図 2区出土遺物（4）.....	32
第17図 2区出土遺物（5）.....	34
第18図 3区出土遺物（1）.....	35
第19図 3区出土遺物（2）.....	36
第20図 3区出土遺物（3）.....	37
第21図 4区出土遺物.....	38

## 写真図版目次

図版 1 遺跡周辺航空写真.....	3	SW001東サブトレンチ断面
図版 2 1 大寺廃寺跡全景（北側）.....	2	SW001東サブトレンチ遺物 出土状況
2 大寺廃寺跡全景（東側）.....	3	SW001北サブトレンチ断面
図版 3 (1区) 1 1Tr 拡張区遺構検出状況.....	1	SD005・SD006・SD007
2 SB001 P1上軒丸瓦出土状況.....	2	SK002断面
3 SB001 P1断面.....	2	SK001瓦出土状況
図版 4 (2区) 1 4Tr 遺構検出状況.....	1	御堂跡全景（北側）
2 4Tr 拡張区遺構検出状況.....	2	SB003
3 SB003・SI001.....	2	SB003 P5断面
図版 5 (2区) 1 SB002 P2瓦出土状況.....	1	SB003 P6断面
2 SD001・SD002瓦出土状況.....	2	SF002遺物出土状況
3 SE001土師器出土状況.....	3	遺物（軒丸瓦）（土器）
図版 6 (2区) 1 SW001・SF001.....	1	遺物（丸瓦）（表）
2 SW001南サブトレンチ断面.....	2	遺物（丸瓦）（裏）
	1	遺物（平瓦）（表）
	2	遺物（平瓦）（裏）
	11	図版11
	12	図版12
	13	図版13
	14	図版14
	15	図版15



第1図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

## I 遺跡の立地

### 1 遺跡の位置（第1図）

八日市場市は千葉北東部、九十九里海岸の北端に近く位置する。南に開いた海岸平野と、東の椿海と呼称される沼沢地、市の北方に広がる台地から成り、大寺廃寺跡は東に椿海のせまる台地東端にある。洪積台地は、標高20～50mで、西の栗山川や北方の借当川、その支流によつて極めて複雑な樹枝状の地形を形成している。

大寺廃寺跡は八日市場市北東隅、大字大寺字助右エ門坂地籍に位置するが、現在の竜尾寺本堂は字御手洗に属する。

栗山川の支流借当川は、市内の台地を分断して東に流れ、その両側に大小いくつもの樹枝状支谷を形成する。その源の一つに竜尾寺南端の小池があり、川は幅50mほどの支谷を南に流れる。遺跡ののる台地はその東側にあたり、竜尾寺及びその南側の墓地などは台地を削平した地盤に建設されたものと思われ、遺跡地との比高差は14m以上ある。遺跡の東側は約160m平坦面が続き、ゆるやかな傾斜で20mほど降ったのちに、わずかな起伏をもって400mほどで椿海に面する断崖へと至る。

北側をみると、栗山川の中流域へ達する4kmに及ぶ大支流からさらに入り組んだ支谷が遺跡の200mほどの位置まで入り込んで、東西に長い台地を形成する。

遺跡は南北200m弱の狭隘な尾根状の台地と、借当川とその北方支流の造りをした東西に伸びる台地との接点にあたる標高41mの高台にある。このわずかな平坦面に方形の区画を置くすると、東西南北とも一辺150m～160mに限られよう。

御堂跡は大寺廃寺跡から北東へ、直線にして650m離れた、大字大寺字小谷地籍に位置し、その南側には御堂下、東側に古郡といった字がみられる。

椿海から北へ入り込んだ三条の支谷の一つが遺跡の南端にまで及び、東側も他の一つによつて画される。大寺廃寺跡で述べた北方支流の末端はさらに東へ伸び、それから派生する小支谷とともに東西及び北側をめぐる。

各方向とも閉塞された状態で、北側に突出した台地上全体が遺跡地にあたり、南北220m、東西120m、標高41mを測る。

### 2 周辺の歴史環境（第2図）

縄文時代～弥生時代にかけての八日市場市は、海岸沿線や支流の奥部に40ほどの遺跡が散在し、とくに、海岸平野および椿海の縁辺の低湿地から多くの丸木船が発見されている<sup>(1)</sup>。

古墳時代以降になると、わずかな平坦面をもつ台地上のいたるところに集落が營まれ、かつ高塚古墳と錯綜していることが注目される。今までの発掘調査例からみることとする。



1. 大寺廻寺跡 2. 舞堂跡 3. 大寺遺跡 4. 大寺出羽道跡 5. 関ノ古墳群 6. 中野古墳群 7. 錦内古墳群  
 8. 関古墳 9. 広ノ台遺跡 10. 織子ノ古遺跡 11. 柳台遺跡 12. 真々畠古墳 13. 真々塚遺跡 14. 小山遺跡  
 15. 丸山横穴群 16. 美女塚横穴群 17. 鮎地土横穴群 18. 貝乱坊横穴群 19. 馬洗横穴群 20. 八重崎横穴群  
 21. 鰐ノ山横穴群 22. 平木遺跡

第2図 遺跡周辺地形図 (1/50,000)

大寺遺跡（3）は御堂跡地区に近接した台地上にあり、昭和52年の調査では長さ1kmにわたって住居跡31軒が検出された。このうちの約3分の1が古墳時代後期で、他の13軒が奈良時代から平安時代後期にかけてのものである。導水路建設の調査であるから、南北の拡がりは不明であるが、ほぼ全面的にわたる大集落であったことは間違いないところである。大寺出羽遺跡（4）では平安後期の住居跡が1軒と溝状遺構が発見され「大」と墨書きされた土師器や平瓦の破片も出土している。また大寺遺跡北側の山田町蓋付道遺跡からも古墳時代後期・平安時代の住居跡各1軒が検出されており、これら3遺跡を含めた地域全体が1つの遺跡である可能性が大きい（<sup>83</sup>）。この広大な地域の縁辺に、東は関ノ台、北側に中野・西に鉢内の各古墳群が所在する。

大寺廃寺跡の南方約1kmの飯塚遺跡群は、昭和55年から6年間にわたって調査された（<sup>83</sup>）。

雉子ノ台遺跡は弥生後期から古墳時代後期の住居跡21軒とともに終末期の方墳・円墳が11基検出され、また真々塚遺跡は南面する急傾斜地に9軒の平安時代住居跡が発見された。遺跡群の南端に位置する小山遺跡からも古墳時代後期住居跡14軒とこの集落の廃棄後に終末期古墳群が営まれたことが推察される。

柳台遺跡は弥生時代後期から平安時代の大集落である。古墳時代後期68軒、奈良～平安時代250軒ほどが検出された。集落造営は7世紀初頭から始まり8世紀から9世紀の中頃が最盛期となり「王口私印」の青銅印や和同開珎など特筆すべき遺物が出土した。「序原」「序」といった墨書きがみられる他、また本遺跡では調査以前にも「千校尉」の墨書き土器（<sup>84</sup>）が広く知られており、調査者は「柳台に居住していた人々が龍尾寺建立に関わったことが窺える。」としている（<sup>85</sup>）。

飯塚遺跡群においても広ノ台、雉子ノ台、小山の各遺跡から終末期に比定される古墳群が重複して認められ関向古墳（7世紀前半）も近接する（<sup>86</sup>）。さらに椿海に面した南北に連なる急斜面に丸山横穴群から南の鷺ノ山横穴群まで、確認されたものだけで7ヶ所数10基を数えることができる。鷺ノ山横穴群2基とともに7世紀初頭の構築と考えられ（<sup>87</sup>）、飯塚地区の集落跡の造営開始と機を一にしている。

こうした7世紀代の急激な動きのなかから、8世紀初めとされる竜尾寺（大寺廃寺跡）の経営基盤が醸成されるとともに、寺院が建立されるに至ったのであろう。

奈良時代から平安時代前期にかけて前述したように多くの集落が周辺に展開する。とくにこれまであまり知られていなかった海岸底地帯の砂丘列上にも多くの遺跡が所在することが判明してきた。最近調査された平木遺跡（22）もその一つである（<sup>88</sup>）。古代地方寺院として隆盛した竜尾寺の版図が、ここまで及んでいたかは問題としても、この地方の実り豊かな様相が窺い知れる。

（注1） 八日市場市史編さん委員会編『八日市場市史』上巻 昭和57年

- (注2) 北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団(渋谷眞平他)「大寺遺跡」 昭和53年  
「大寺出羽遺跡」 昭和55年 「妙名遺跡」 昭和51年
- (注3) 八日市場市教育委員会(神山崇、福間元他)「飯塚遺跡郡発掘調査報告書」 昭和61年
- (注4) 高木博彦・桜井茂隆「八日市場市出土の「千枚尉」と記された墨書き土器について」『史館』第12号 昭和55年
- (注5) 福間元「八日市場市飯塚遺跡群(旧匝崎郡)」「房総における歴史時代土器の研究」(房総歴史考古学研究会) 昭和62年
- (注6) 関向古墳発掘調査団(安藤鴻基他)「関向古墳発掘調査概報」 昭和50年
- (注7) 八日市場市教育委員会(萩悦久、藤崎宏道)「横穴墓群発掘調査報告」 昭和63年
- (注8) 千葉県文化財センター(小久賀隆史)「八日市場市平木遺跡」 昭和63年

## 調査の経過と方法

### 1 調査の経過

10月2・3日 大寺廃寺跡の現地工場用地内に物置・テント等を設営し、その間に調査区全景写真の撮影や仮杭の設定を行う。また一部の上物移動など環境整備も併行して実施する。

10月5日～21日 5日からトレンチ発掘調査を開始する。まず東側(1区)畑地の表土除去を始めたが、堆土量が予想に反して多いためスイッチバック方式で掘り下げることとした。すなわちトレンチの一部について遺構検出・精査・実測・撮影を行い、埋戻した後に他の部分を掘り下げ、同じ行程をくり返す。

この方法で21までの間に北側(2区の一部)を含む調査を実施し、掘立柱建物跡、基礎様の硬化面、溝跡など寺院跡に結びつく成果を得た。

10月23日～27日 東南隅(3区)の発掘と駐車場用地(2区6Tr)の重機による掘削を平行して行う。とくに6Trでは大形の土坑が検出され、この掘り下げに手間取ったため、25日に予定した重機による埋戻しは、27日に延期する。

10月30・31日 もう1ヵ所の調査地である御堂跡の調査を実施する。まず北側から発掘を始め、掘立柱建物跡を検出し、精査・実測作業の間に南側トレンチを掘り下げる。南側では住居跡を発見したが、検出面の精査を行って終了する。

11月2日・6日 大寺廃寺跡の残務整理を行う。最後に拡張した基礎様硬化面の南東隅にサブトレンチを入れ、土層の確認をし、埋め戻す。6日の午後に調査地区的清掃をし、撤収する。

### 2 調査の方法と各地区の状況

大寺廃寺跡は工場敷地とそれを取りまく畠地・雑地となっており全体として平坦である。調



1 : 1,000  
0 10 20 30 40 50m

第3図 大寺庭跡地形図

査は主として畠地に限られ実施した。ここでは説明の都合上、3区に大別して記述する。

1区 調査区東側の畠地の部分で、便宜上1Tr、2Trと分けた。1Trは当初2m×16mと設定したが、表土が80cm以上と深く、排土が困難となつたため、実際には南半分の1m幅を精査し、その後北半分幅1mを調査するといった変則的な方法をとつた。この段階で、SB001の柱列の一部を確認したので、1Trを北側に拡張し、柱列の延長確認に努めた。結果は、南列3間を検出することができた。

1Trの南側に一段の高まりが認められたので2×2.8mのグリッドを設定したが、やはり1m近くまで削平が及び、遺物も全く出土しなかつた。

2Trは調査区東端、1Trと直交する位置に2×10mをもって設定したが、1Tr同様の状態で80cmまで削平を受け、擾乱土中に瓦など若干出土するに過ぎない。

1区は、全体として重機により転地がえしが深くまで行われ、遺構の遺存は劣悪であったが、擾乱土中に、極めて粘性の高い青灰色粘土の塊が散在することが注視される。

2区 調査区北側中央から西端にかけての、畠地、雑地及び駐車場用地の一部である。720m<sup>2</sup>ほどの範囲に設定した3Tr～6Trがこれにあたる。

3Trとした部分は、当初東半分4×10mを精査し、中央に井戸様の落ち込み(SE001)を検出、瓦を中心にも多量の遺物を得たが、その他の溝、土坑などの遺構はすべて近世以降のものである。東半分の精査を実施し、埋戻した後西半分、2×10mを拡張したが、やはり新しい時期と思われるしみ状の浅い落ち込みが認められるのみで、遺構の精査は行わざ調査を終了した。

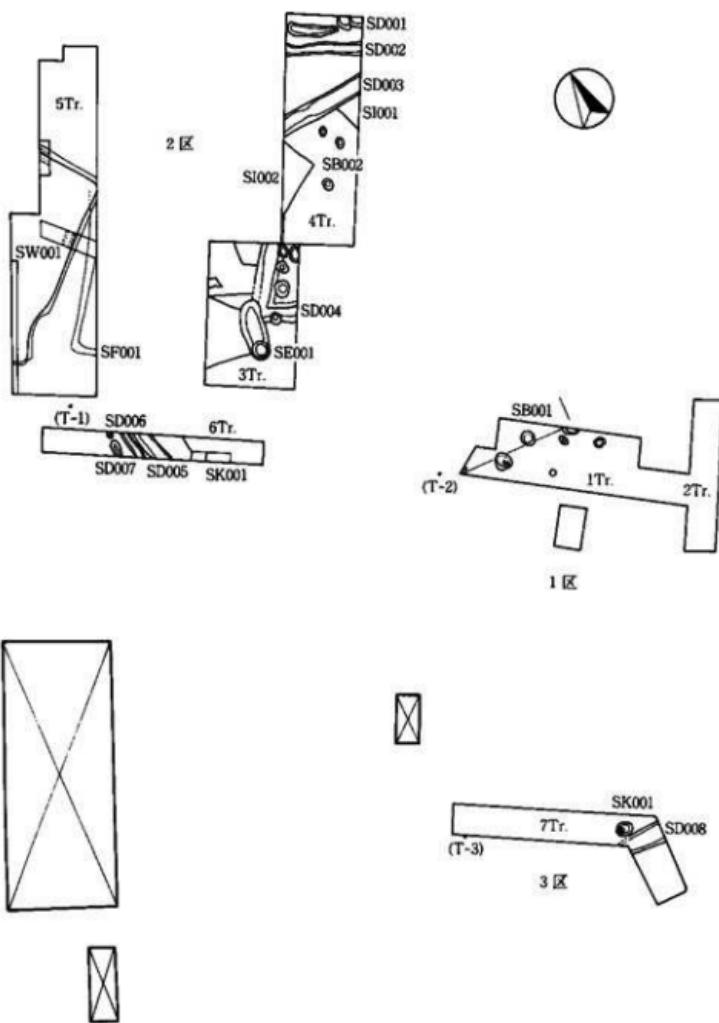
4Trはその北側に接して設定した。本トレンチも排土地の制限から、当初東半2×15.5mを調査し、溝3条、住居跡1軒、柱穴2個などを検出し、精査した。溝及びSB002と柱穴列は西半部に伸びている可能性が高いので、埋戻しの後2×15.5m拡張した。

その結果、住居跡1軒と、溝の延長は認められたが、柱穴列の痕跡はついに検出できなかつた。

3Tr西端から畠地を隔て平行に7.4m西側に5Trを設定した。ここは雑地で、表面の観察から耕作等による擾乱、削平が及んでいないと判断できた。まず4×23.4mのトレンチを調査し、表土下40cmで硬質面が約10mにわたって検出された。精査の結果、方形の基壇である可能性がでてきたので、2ヶ所にサブトレンチを入れ、基礎となる周辺部分に溝状の遺構が存在することを確認した。さらに西側部分に2×8mの拡張区を設定し、南東隅部分を検出することができた。

6Trは3Tr・5Trの南側に直交するよう設定した。南半部はかなり削平を受けており、遺構も遺存しないが東側には溝や大形の土坑を検出、精査の結果、土坑内に瓦が數点認められた。

3区 調査区南東、1区1Trから22m程離れた位置に7Trを設定した。用地内の上物の都合で、変則的な「L」字形のトレンチで、幅2m長さ20mとなる。表土は厚さ70cmあり、全面に



第4図 大寺庵寺跡遺構配置図 (1/400)

わたり、搅乱、削平されており、わずか東端に瓦を出土する溝と土坑が検出されたに過ぎない。なお、土坑内から40余点の瓦とともに常滑焼の大甕片が出土し、後世の遺構であることが判明した。

**御堂跡** 調査は御堂跡遺跡と考えられている範囲のうち北端部分に、2本のトレンチを設定して実施した。

1Tr は、幅5.5m、長さ7.2m の南北に長く、耕作土の厚さは平均して50cmである。表土内には殆んど遺物が認められなかったが、精査の結果、溝状遺構が交互した状態で確認され、柱穴と思われるものが2個北側に検出された。

まず溝状遺構を掘り下げたが、東西に伸びる1条は堅質な土層で道跡と判明、覆土内からは数多くの瓦が出土した。また南北の溝の覆土を取り除くと、溝と平行して柱穴3個を発見した。前述の2個と合わせ掘立柱建物跡であることを確認した。

掘立柱建物跡は、西列3間は確認できるが南・北列はともに1間までしか検出できなかった。柱穴はトレンチ断面にかかる3ヶ所のみを半載して調査を終了した。

1Tr より3m 南側に直交するように3×18.4m の2Tr を設定した。表土は40~50cmで、ゴボウ根付けにより、トレンチと平行して搅乱溝が数条走っており、遺構検出面はすでにハードローム層となる。遺構はトレンチの中央付近に住居跡が2軒検出された。

### III 遺構

#### 1 大寺庵寺跡

##### SB001（掘立柱建物跡）第5図

調査区東側（1区）1Tr内に位置する。検出面は表土下60cmのハードローム層内である。確認されたのは一列の柱穴4個のみで、トレンチ内にこれと直交する位置に柱穴が検出されなかった点を考えると、南列の一部である可能性もある。以下柱穴毎に記述する。

P<sub>1</sub>とした柱穴はトレンチ北壁にかかる約3分の1だけ検出できた。上面での規模は120×95cmの横円形と推定する。柱痕は上面において確認できない。掘りかたは基本的には深さ45cmの断面的箱形を呈し、その東端をさらに25cm程掘り窪めて柱を埋め込んだものと思われる。断面を観察すると、3・4層はさらっとした軟弱な黒色土で、ローム粒子を若干含み、下層に至ってやや硬さを増し、径30cmほどの柱痕のなごりと思われる。5層は明るめの堅質な暗褐色土で築き固められたことがわかるが、同じ裏込めと考えられる6層（黒褐色土）は軟かい。柱穴東端の上面からは軒丸瓦（12-1）が裏返しとなって出土し、5層内には平瓦片（同2・3）などが埋め込まれた状態で出土した。

P<sub>2</sub>は径95cmの円形で、深さ35cmの皿状の掘りかたである。断面観察では3層とも斜行しており自然な流入堆積と判断できる。ともに暗褐色土で上層から順にローム粒子の含有が減り、硬さも減ずる傾向にある。なお2層中に山砂様の粘土が塊状に認められる。

P<sub>3</sub>は上面では120×100cmの円形の東端に突出した部分が付帯する形状である。半載した結果、深さ30cm、断面箱形となり、その中央に径30cmのわずかな窪みをもっている。その覆土は外側（7～9層）に褐色土でローム塊が多く含んだ層がみられ、中央に暗褐色土の単純層（6層）がある。

本柱穴は埋没後にさらに新しい柱穴が重複しており、その深さは65cmを測る。その規模は断面でのみみると、土面の径70cm、底面で20cmのロート形を成すものと思われる。土層は1・2層が暗褐色土で2層にはローム塊が多く含有、3層は黒色土である。4層も黒色土だが、P<sub>2</sub>のように粘土小塊がみられる。5層は粗い褐色土である。

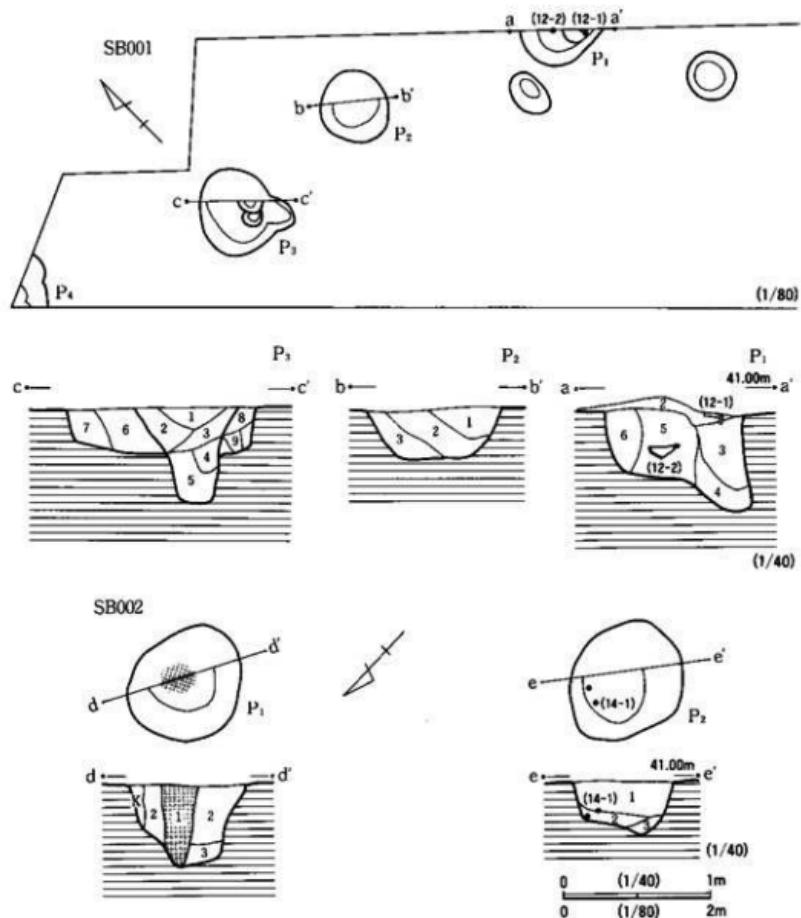
P<sub>4</sub>はトレンチ末端にわずかに検出できたに過ぎず、形状等不明である。現状では2つの部分からなり深さ30cm以上、少なくとも100cmほどの規模で、断面箱形を呈すものと推察する。

各柱穴で共通するのは、ほぼ円形で、断面は箱形を呈し、深さ30～45cmを測ることであろう。なお土層の違いや柱間・配列にかなりの差があることも事実である。柱痕を残すP<sub>1</sub>を基本に柱間距離を測ると、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>320cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>230cm、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>370cm強、P<sub>2</sub>を除き線上に並ぶ。本報告では掘立柱建物跡と考えておくことにしたい。

SB002 (柱穴列) 第5図

調査区北側(2区)4Trに2つの柱穴が確認された。検出面はローム上層である。

P<sub>1</sub>で上面で80cmの円形で、ほぼ中央に径25cmの黒色土が遺存する。深さは55cmでわずかにポート状を呈す。断面の観察では中心に黒色土の軟弱な層(1層)がみられ、周囲をローム粒を含む暗褐色土で(2・3層)で築き固めている。



第5図 SB001-002 遺構

P<sub>2</sub>も80cmほどの円形で、深さ35cmの断面箱形を呈す。覆土は1層に軟弱な暗褐色土、2・3層はP<sub>1</sub>とよく似た土層である。覆土の中位から瓦片2点(14-1)が出土した。

P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間の距離は300cmを測るが、周辺の精査にもかかわらず、同様の規模の柱穴は検出されないため、掘立柱建物跡と断することはできないが、ともに同様の土層を有し、一は柱痕が、他は瓦を伴うなど、柱穴と考えて大過なかろう。

#### SW001(基壇様硬化面) 第6図

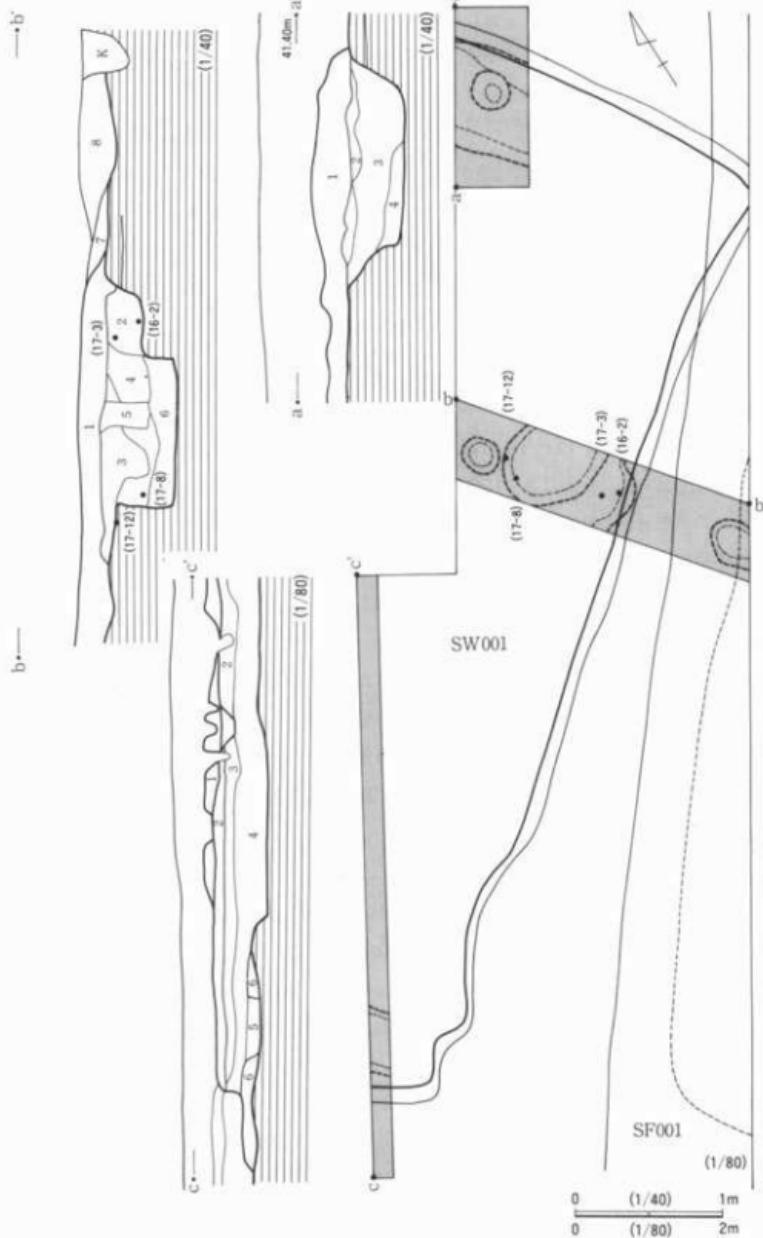
調査区北西部(2区)5Tr内に位置する。表土下40cmほどから広範囲にわたって暗褐色土の光沢のある硬い面が検出された。上面は凹凸が著しくブロック状に剥落するような状態を示し、東側では道跡としたSF001が、この面上を走り抜けている。

基壇様硬化面は、最終的には東縁部がほぼ確認され、その上面での長さは13mである。形状は北東隅ではほぼ方形を描くが、南東隅部はやや乱れている。上面は前述の如く凹凸が著しく、ガラス片等が多く認められる。全体として中央部が高く、縁に向かって下り、その差は北縁で10cmにも達する。各縁とも30°以上の傾斜をもって比較的明瞭に降っており、北・東縁では構築面である褐色土面から25cmほどの高さがある。

次に断面の観察について述べる。北縁部では、非常に堅く版築された黒色土がブロック状に破碎された状態で、25cmの厚さをもつ土層(1層)がみられる。北縁下には幅150cm、深さ35cmの溝があり、その覆土は軟弱な黒色土(2層)、硬質暗褐色土(3層)、褐色土(4層)の順である。東縁部も同様の基盤の下にやはり溝状を呈す深さ25cmの落ち込みがみられ、さらに75×65cmの横円形の土坑が穿たれている。前者の土層(2層)は暗黄褐色土で、土坑内は軟質黒色土(3層)、硬質暗褐色土(4層)、暗黄褐色土(6層)が順次堆積し、中央に軟弱な真黒色土(5層)が縦にみられる。

南東側に設定した幅30cmのサブトレンチは、版築の構造をよく把握することができる。まずやや凹凸の激しいソフトローム上層の褐色土面に、丁度南縁にあたる部分のみに暗褐色土(6層)の堅い盤面を造り、その中央には幅90cm、深さ20cmのやや明るい暗褐色の覆土(5層)をもつ溝状の掘り込みがみられる。トレンチの幅が狭く、その形状は不明で、他のトレンチで検出された溝と同様の意味をもつか否か判断できない。盛土はしまりのあるローム塊を含んだ暗褐色(4層)、軟弱な黒色土(3層で北縁部の2層に相当)で、30~50cmの厚さがある。その上に、まず厚さ10cmほどの褐色土やロームを含んだ暗褐色土(2+2'層)の版築層がみられ、最上面に黒色土版築面(1層で他の1層と同一)がある。この面は南縁にまで達せず中央付近のみ拡がっている。

本跡を基壇と考えるのは、上層は非常に堅く、よくみると水平に織様の線がみられ、版築によることが明らかである。また各縁部に箱形断面の浅い溝がみられ、版築の際に区画が成された痕跡と思われる点も掲げられよう。なお1層とした面は、ブロック状を成すことから、いづ



第6図 SW001 遺構

れかの版築土層による再構築面と思われる。

遺物としては、東縁部サブトレイン内に平瓦片（15-7、16-2・6、17-3）のほか、灰釉陶器（17-12）、土師器杯（17-8）が2・3層から出土している。

#### SE001（井戸状遺構）第9図

調査区北中央（2区）3Tr内に位置する。南側の100cm正円筒形部分と、長さ240cm、幅110cmの長方形部分から成る。前者は1.5mまで掘り進めたが、さらに1m以上と深い。後者は北端で上面から45cmの深さがあり、円筒部に至るまで約30度の傾斜をもって下降する。土層は上層に粗い褐色土が、下がるにつれて黒色土となるが、断面は雨による崩壊で図化できなかった。

中からは多数の瓦細片（13-1、15-2、17-4）のほか、土師器（17-6・7）が中位から出土した。

#### SK001（土坑）第9図

調査区南東端（3区）7Tr内に位置する。攪乱溝で破壊されているが、およそ1mの円形で、深さは30cmあり、一部はさらに柱状に30cmほど掘り下げられている。遺物は上段内にのみ出土した。大小瓦片と軟質砂岩礫が折重なって埋め込まれていたが、底面から常滑の大窯焼大甕片が発見され後世のものであることが判明する。瓦には宇丸瓦（18-1）や丸瓦（18-2）平瓦（18-4・5、19-1・3・6、20-1～3）がある。

#### SK002（土坑）第8図

3区南端6Tr内に位置し、表土下70cmに検出された。形状は不明であるが少なくとも4mを超える規模で、1.3mまで掘り下げた。覆土は全体に硬質で、暗褐色土（1・3層）、褐色土（2・5層）の互層を成し、端に粘性の高い山砂土（4層）がみられる。

1mほどの下位から平瓦（16-3・4）が、底面から土師器杯（17-11）、遺構の上面から須恵器盤（17-13）が出土した。

#### SD001（柱列様溝跡）第7図

2区北端、4Tr端に位置する。幅70cm、長さ345cm、深さ25cmにも溝たない溝状の底面は凹凸が著しく、その東側にも径1mほどの円形土坑や方形土坑が連続している。いずれも浅く、覆土は黒褐色土（14層）、黒色土（15層）で、周辺からローム粒（16層）が流れ込んでいる。表土層である軟弱な暗褐色土（3層）を切って作られる。底面より軒丸瓦（13-3）などが出土している。

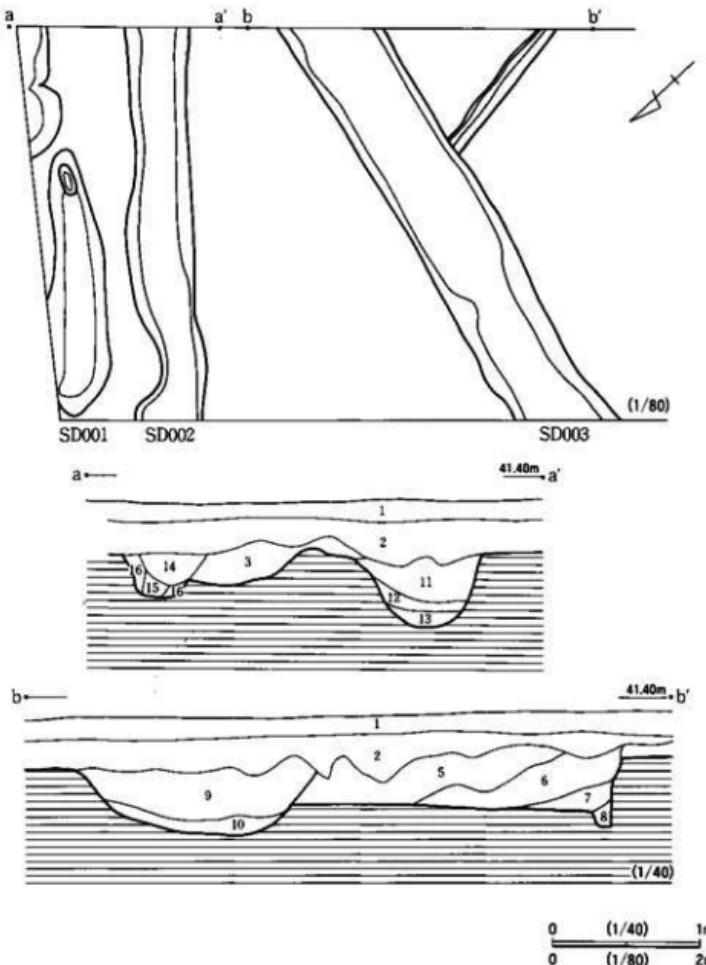
#### SD002（溝跡）第7図

SD001に平行して検出された。幅70～90cmと一定しないが、掘り込みは整った箱形断面を呈し、深さは40～50cmあり、底面は平坦でほぼ水平である。覆土は暗褐色土（11層）、黒色土（12層）、暗黄褐色土（13層）と自然堆積を示す。表土3層が上面をおおっており、SD003との間の攪乱坑により一部破壊されている。

本跡からは丸瓦（14-8）平瓦（15-4）など瓦片が上層から多量に出土している。ある程度埋没した後に何らかの理由で溝内に廃棄した可能性もある。

### SD003（溝跡）第7図

2区北端4Tr内に位置する。住居跡(SI001)を切って構築され、北に隣接するSD002とは約



第7図 SD001~003, SI001 造構

30度のずれをもって東側で重複するものと思われる。

上面での幅120cm、底面で90cm、深さは検出面から25~45cmと一定しないが、西から東に向けて傾斜している。整った断面箱形の溝で、確認した6.2mの範囲内では一直線である。方向はほぼ東西となる。

覆土は暗褐色土で、下層（10層）ほど暗めでローム粒の含有が多くなる。本跡からは土師器壺（17-10）が検出されたが、恐らくSI001の所産であろう。

#### SD004（溝状遺構）

2区3Tr内を縦走し、SE001と接する部分で東に屈曲する。幅100~120cm、深さ15~25cmの断面皿形を呈し、溝の東縁に円形・皿状の窪みが数個ある。瓦などの遺物量も多いが、粒の荒い軟弱な褐色土やローム塊が充填しており、近世の遺構と判断した。

#### SD005（溝跡）第8図

調査区北側（2区）の6Tr内に平行して走るSD006・007とともに検出された。幅100cm、深さ25cmで底面は平坦となり、北に向かってわずかに傾斜する。断面形は逆台形を呈し、一直線には南北に走るものと思われる。

覆土は、上層は表土中の単純暗褐色土（4層）と殆ど同じ（6層）で、一部に極めて堅質な土層（7層）がみられるが、平面的には確認できない。下層（8・9層）は粘性の高い黒色土で、9層には粘土粒が若干含まれる。

6層中から瓦が出土しているが、形態・方向等からSD003と共通するところが見える。

#### SD006（溝跡）第8図

SD005の西40cmに平行して、幅50cmの浅い窪みが検出された。深さ10cmほどであるが、砂質な黒色土（10層）内からは丸瓦（14-2・7）ほか数点が出土している。

#### SD007（柱列様溝跡）第8図

SD006の西50cmほどの距離に位置する。長さ120cm、幅50cm、深さ40cmの土坑と近接して、径50cm、深さ20cmほどの円形の窪みがある。精査の結果、わずかながら溝状の窪みで連絡することが分かった。覆土は褐色土（12層）で形状、土層からSD001に近似するようである。

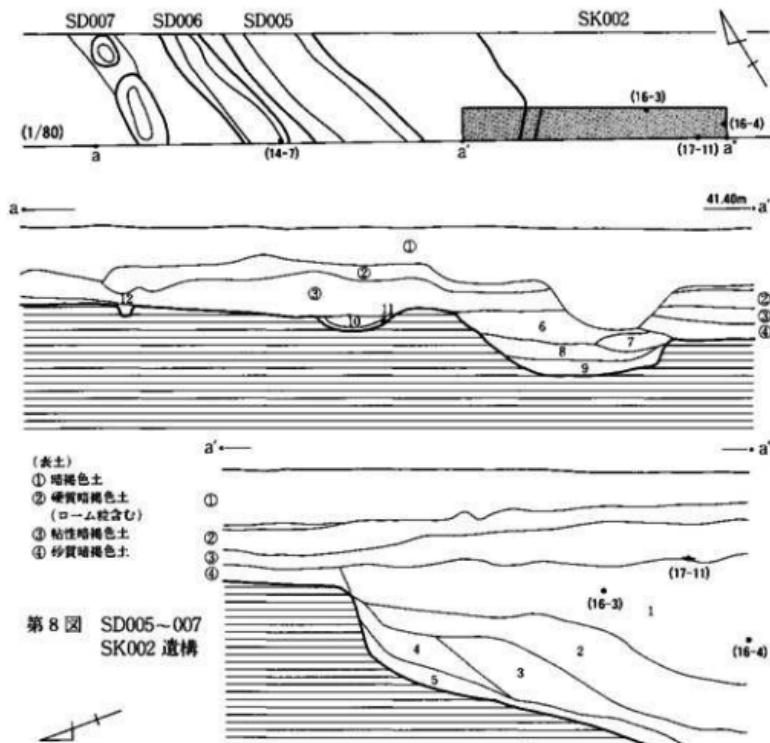
#### SD008（溝跡）第9図

調査区南東隅（3区）7Tr内に位置する。幅150cm、深さ25cmの断面箱形で、底面は平坦となる。確認できたのは2mの長さだけであるが、ほぼ東西に一直線に走るものと思われる。

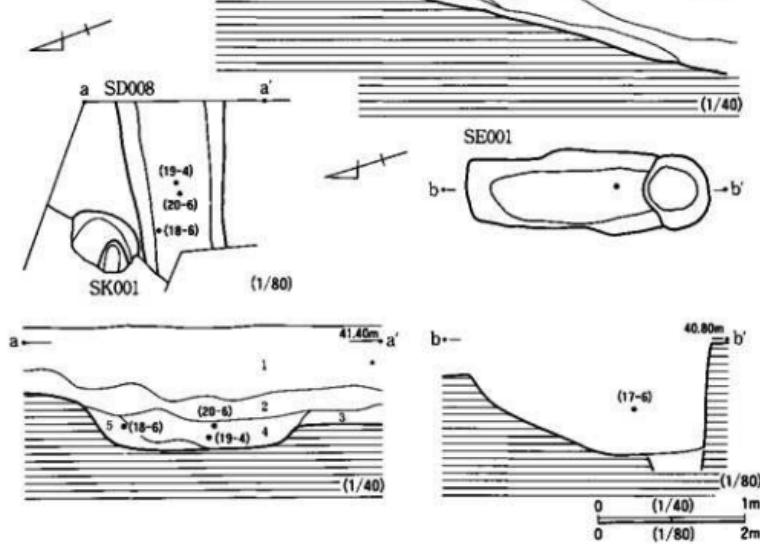
覆土はローム粒を若干含む黒色土（4層）黒褐色土（5層）で、自然堆積と思われる。覆土内には平瓦（18-6、19-2・4・5・7、20-4）などの他、須恵器壺片（20-5）同長頸瓶（20-6）が出土している。

#### SI001（竪穴住居跡）第7図

2区4Tr内に位置し、SD003に切られる。西壁部分をわずかに確認し、精査の結果、中央に盛



第8図 SD005~007  
SK002 遺構



第9図 SK001・SE001 遺構

り上がる硬質の床面と、幅15cm、深さ10cmの壁溝を検出した。

覆土は40cmほどの自然堆積で、暗褐色が主体で、上層からローム塊を多く含む層(5層)、しまりがありローム粒を若干含む層(6層)、単純暗褐色土(7層)、褐色素粒子を多く含む層(8層)となる。

遺物は殆どないが、SD003内の土師器甕がこれに相当すると考えられる。

#### SI002 (竪穴住居跡)

2区3Tr内、SI001から西へ4mの位置に検出された。上面では明るめの暗褐色覆土がみられ、深さは40cmほどと思われる。遺構の精査は行わなかったが、前述住居跡と同規模、同時期に相当すると考えられる。

#### SF001 (道跡) 第6図

2区5Tr内をSW001の一部上面にかかって検出された。18mの距離が確認でき、その南端は直角に東へ曲がる。幅は平均して80cmほどしかなく、硬質の砂質暗褐色土(8層)が盛り上がった状態で認められる。

## 2 御堂跡

調査上の統一を図るために本書では調査区を4区とし呼称し、8Tr・9Trを設定し、また遺構番号も、大寺廃寺跡から引続くこととした。

#### SB003 (掘立柱建物跡) 第11図

8Tr内に西列を中心に検出された。SF002、SD009とも本跡より新しい遺構である。西列の方向は、ほぼ南北を示す。以下柱穴各個について述べる。

北中央の柱穴をP<sub>1</sub>とし、左回りに番号を付した。P<sub>1</sub>は3分の1ほど検出でき、径120cmほどの円形と推定される。上面北端には径65cmの範囲に灰白色の山砂様土層(以下白色土と呼ぶ)が観察された。断面は箱形素掘りで深さは75cmを測る。白色土(3層)は20cm充填され、その下に白色土が若干混入する暗褐色土(4層)、ローム粒を若干含む黒色土(5層)、ローム塊を含む褐色素粒土(6層)があり、これが柱痕を成す。築き固められた裏込め土は、基本的にはローム塊を多く含む褐色土(7層)、暗褐色土間層(8層)が交互にみられ、7'、7"層へとローム塊の含有度を増す。

P<sub>2</sub>は径90cmの円形で、西端に径45cmの白色土部分が見られる。深さは80cmと推定した。P<sub>3</sub>は90×85cmの方形を呈し、やはり西端に40×30cmの白色土があり、深さ75cmと思われる。P<sub>4</sub>は110×95cmの横円形で、75×50cmの広さで白色土がみられ、深さ80cmを測る。

P<sub>5</sub>は径130cmのほぼ円形で、やはり箱形の素掘りとなり深さ75cmを測る。上面では白色土が認められず、掘り下げるに従って約20cm下位から、西端にへばり付くように径40cm、厚さ20cmの



第10図 御堂跡地形図 (1/1,000)  
及び遺構配置図 (1/400)

範囲に発見された。裏込め土は、基本的にはP<sub>1</sub>に同様であるが、上層に暗褐色土の間層(8層)がみられ、以下ローム粒を多く含む褐色土(7層)、8層、ローム塊を多く含む褐色土(7'層)と互層をなし、底面に真黒色土(9層)がみられる。

P<sub>6</sub>はほんの一部を検出したに過ぎないが、径90cmほどの規模となろう。上面で白色土が観察できる。断面は中心を表していないが、現状で深さ75cm、東にずれて柱痕を示す暗褐色土(4層、P<sub>1</sub>の4層に相当)が、その中央に径25cm、深さ30cmにわたり白色土(3層)がみられる。裏込めはローム塊を混じた暗褐色土(7層)、暗褐色土(8層)の築き固められた互層で、下層はローム塊を含む軟弱な褐色土(10層)となる。

これら柱穴の共通する点をまとめると、ほぼ一定の大きさと深さがあり、柱痕と考えられる部分に白色土が遺存し、断面観察のできた3個については、かなりしっかりと裏込めが行われていることなどである。

柱痕間の距離をみると西列は170cm、直交するP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>間、P<sub>3</sub>-P<sub>6</sub>間はともに195cmと推定できる。東西の柱間は3間で確定できるが、南北は2間以上で不明である。

#### SD009 (溝跡) 第11図

SB003西列とほぼ平行に検出された。幅80~90cm、深さ15cmの浅い皿状の窪みで、黒色土の覆土(2層)は軟弱であり。若干の瓦片が出土した。

#### SF002 (道跡) 第11図

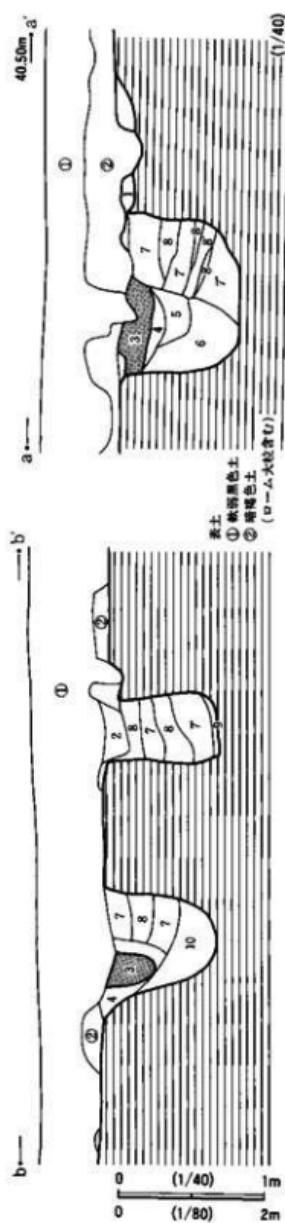
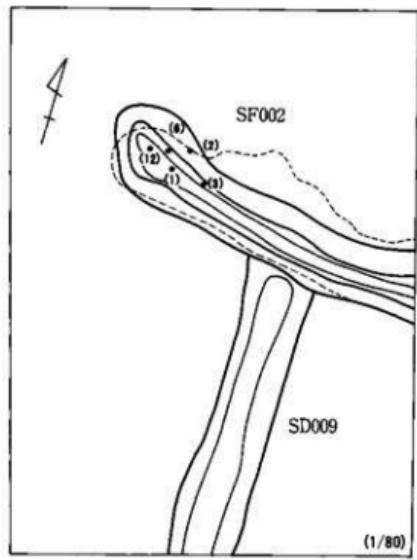
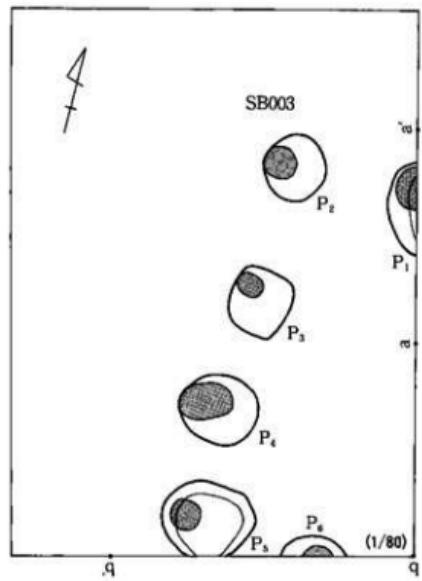
SB003西列と直交し、この建物跡の廃絶後に造られた遺構である。暗褐色土の硬質面(1層)は、図の点線内に限って認められ、その幅は80cmほどである。硬質面は溝の下底にまで及び、その土層内からは多くの瓦片(21-1~6)が、また須恵器壺片(21-12)も出土した。

#### SI003 (堅穴住居跡)

調査区南側の9Tr内中央付近に位置する。東西560cm方形で、北壁中央にカマドがある。覆土は明るめの暗褐色土でざらつとした感があり、深さは40~45cmと推定した。上面からは瓦の細片(21-7・8)と本跡に伴う時期とえることのできる土師器壺(21-11)などが出土している。

#### SI004 (堅穴住居跡)

SI003の東方に北東隅部がわずかに検出された。覆土はSI003と酷似し、深さは50cmとなる。



第11図 SB003・SD009・SF002 遺構

## IV 遺 物

遺物の総数は平箱にして10箱ほどであり、そのうちの95%は瓦片である。ここでは、記述の都合上、各調査区に大別し、瓦、その他について一括して説明を加えることとする。

### 1 大寺廃寺跡

#### a 1 区 (第12図)

**軒丸瓦** (1) 径10.4cmの内区と幅1.6~1.9cm、外径15.4cmと推定される額高の周縁部からなる蓮華文軒丸瓦である。径2.3cmの中房の中心にわずかに蓮子の痕跡がみられるが、周縁の蓮子は不明瞭である。蓮弁は中心を深く抉った肉厚の単弁で、六葉がほぼ均等に配される。蓮弁間は隆起線文とでもいおうか、幅2mmほどの線で区画される。周縁帯は瓦当面より2.2cmも高く、平縁となる。全体に淡褐色を呈す。造作は内区部を型取りした後に周縁帯をめぐらす独特のものである。

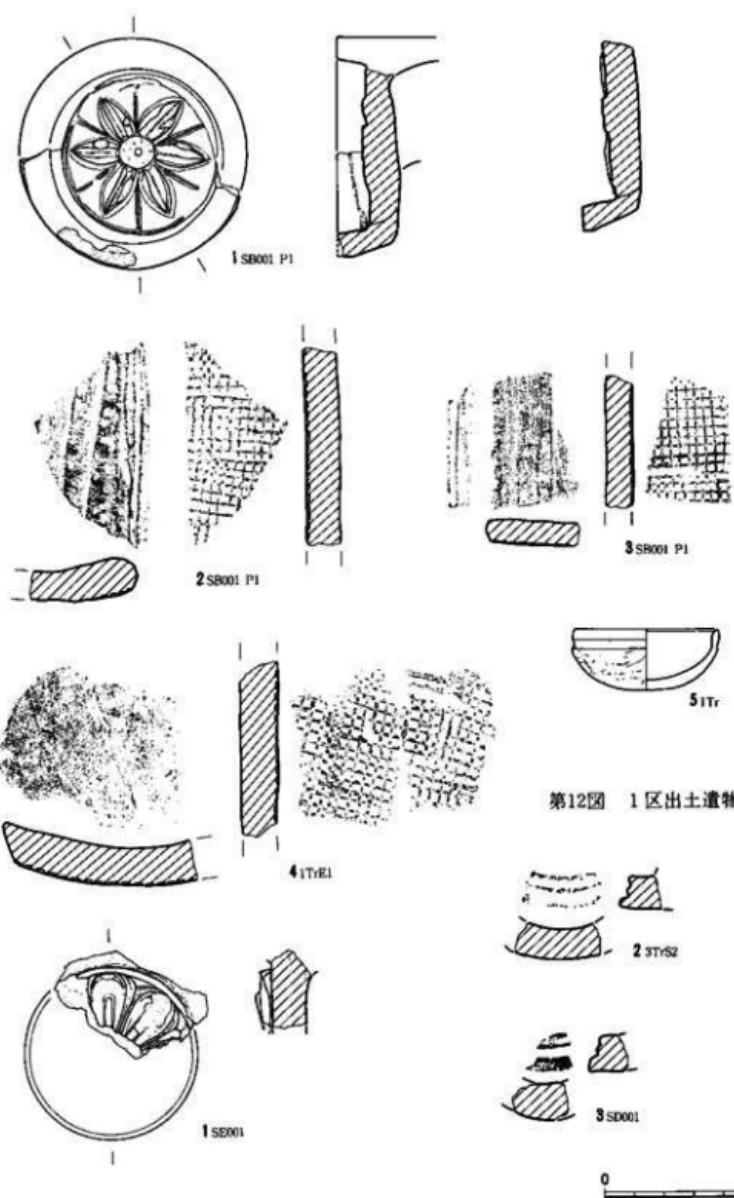
**平瓦** (2・3) いずれも裏面に明瞭な格子叩目がみられ、目の大きさは稜と稜の間(以下同様に計測する)で6~7mmである。表面は細かい布目をかきへらで削り消す(2・3)か全面丁寧にへらナデ(4)している。縁の調整は2で多面取り、他は直線的に2面を取る。2は灰色・3は灰白色・4が淡褐色を呈す。

その他 (5) 土築器丸底杯で、口径9.7cm、高4.1cm、ほぼ半球形で中位に強いナデによる沈線を設け稜を模している。粘土紐巻上痕がのこり、外面へらナデ、内面は放射状に磨き上げ後に炭素吸着処理が施される。淡褐色が基調である。

#### b 2 区 (第13図~17図)

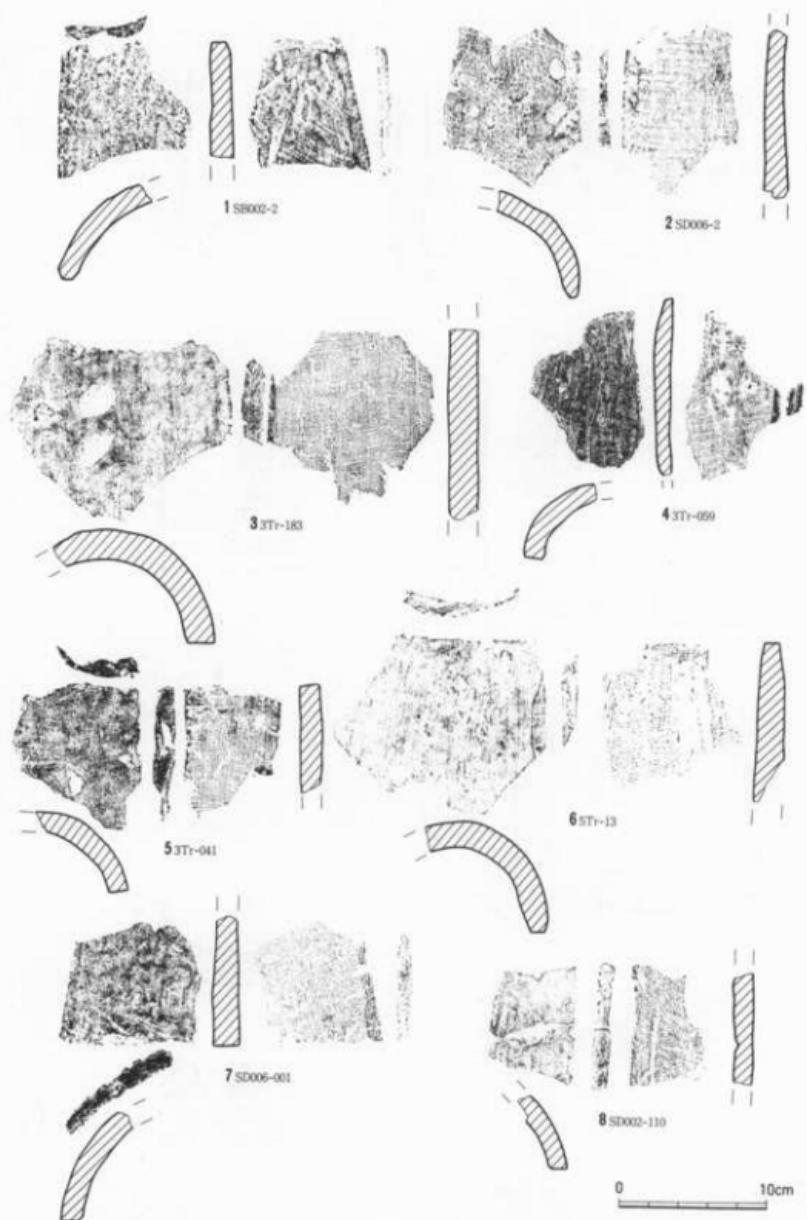
**軒丸瓦** (13-1~3) 1は内区残欠で、11.7cmと推定される。遺存する蓮弁は肉高で、中心に子葉を造り出し弁端は反り返る単弁で、間弁が配される。外区との境は幅3mmの無文帯がめぐる。若干のずれもあるが8葉であろう。中央で2.4cmと部厚く、上端の丸瓦に連なる部分にはヘラ様工具による刻みが幾条もみられ、接合し易く工夫されている。胎土に鉱石微粒を多く含み、褐色を表す。2・3はともに周縁帯で2条の圈線が表わされている。圈線は明瞭で7mmの幅があり、外縁は一段と高まる。2は内区との差が1.6cmもあり額が長いことを示している。共に灰色を呈すが、別個体である。

**丸瓦** (14-1~8、15-1) 表面の調整は殆どの場合かきへらによる縱方向の削りっぱなしであるが、5・8はその後にさらに横にナデしているようである。叩きしめた痕跡は8にわずかに認められ、細繩目が数条残る。裏面は細布目が全面にみられるが、いずれもねじれを起していることがわかる。また1はへら様のもので再調整されている。分割面はすべて直線的で、裏面にのみ面取りを施すもの(14-1・2・4・7、15-1)もある。前縁が残るものは14-

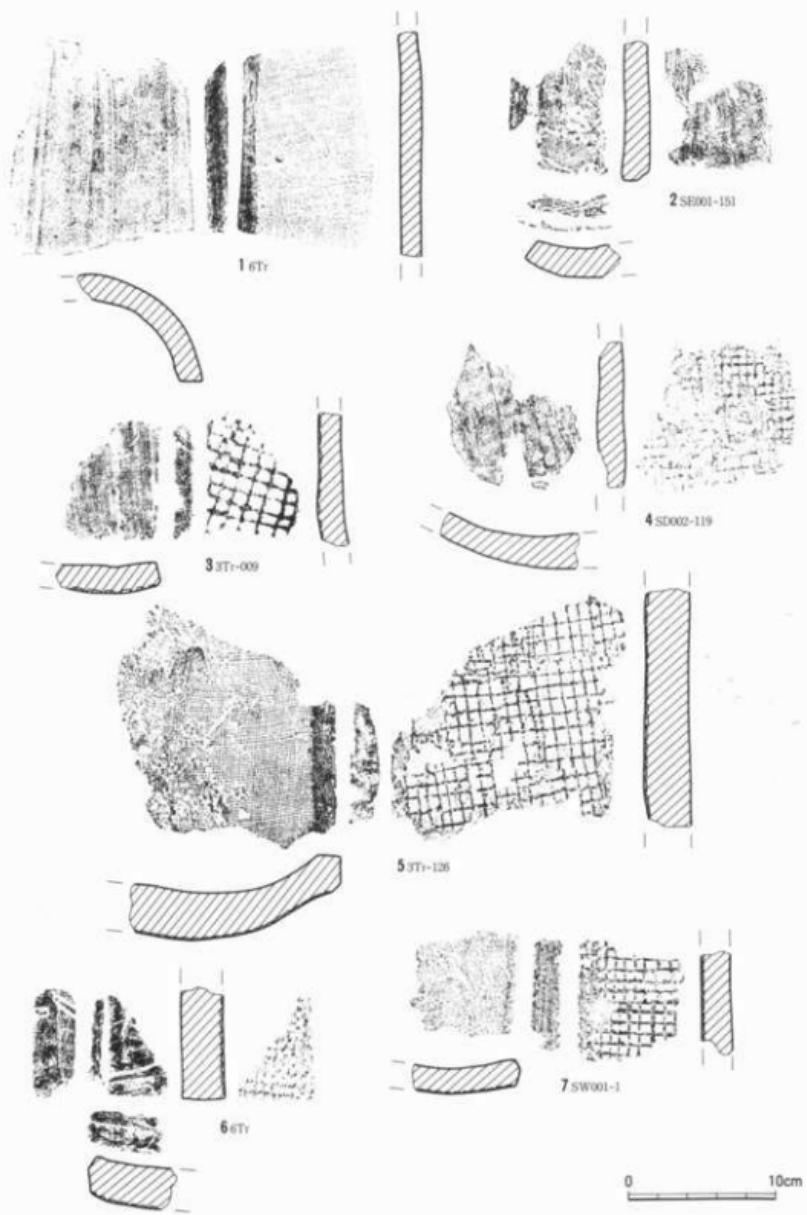


第12図 1区出土遺物

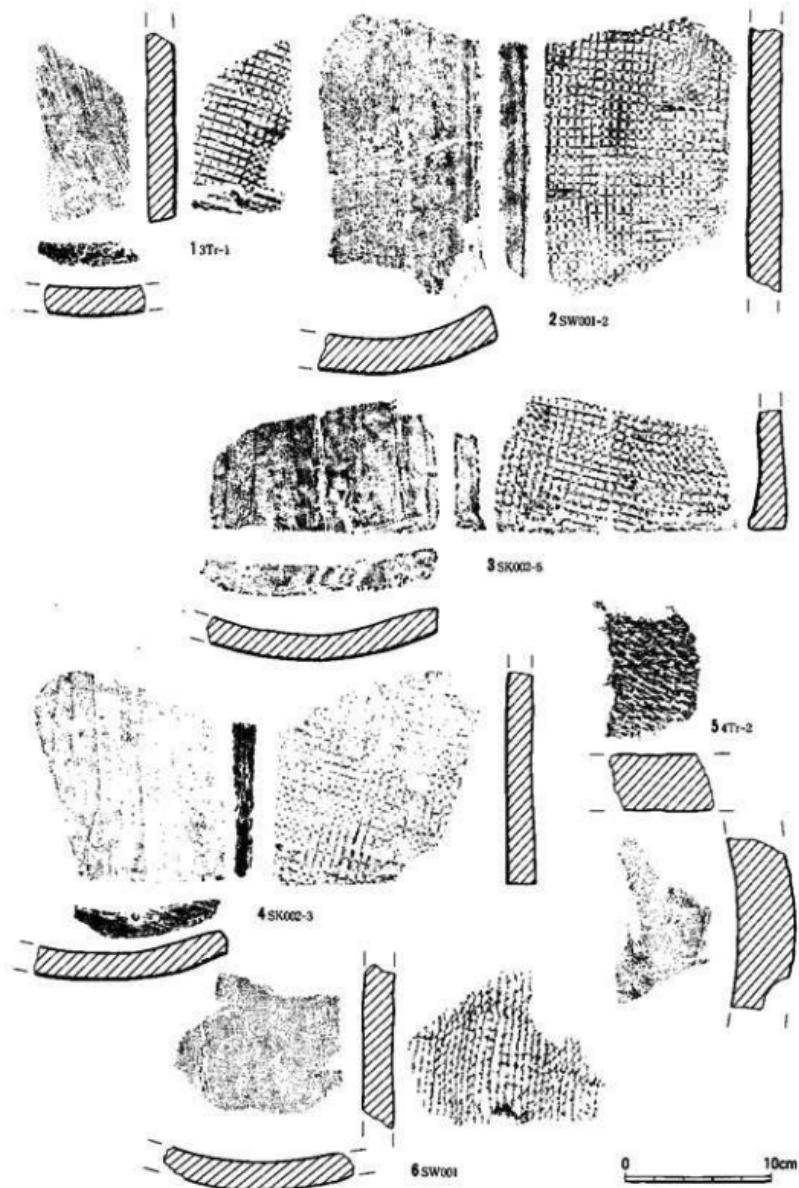
第13図 2区出土遺物(1)



第14図 2区出土遺物(2)



第15図 2区出土遺物(3)



第16図 2区出土遺物(4)

7のみで幅16mm、ナデ調整される。逆の重合部は厚さ3mmのもの（4）から12mm（6）まであり4点とも行基式であり、本遺跡からは玉縁式のものは1点もない。色調は淡褐色（6～8）、くすんだ灰褐色のものにわかれ、いずれも堅く、焼きも良い。

**平瓦**（15-2～7、16-1～16、7-3～5） 15-2は叩しめ後のかきへら調整がなされ、表面の布目がかなりねじれている。灰色で、軽質である。

格子叩目のもののうち15-4は目が判然とせず、胎土もしまりがないが、他はしっかりと叩きしめられており明らかに斜格子目るもの（15-3、16-1、3）もある。表の布目については極細の15-3のほかは、何らかのかき削り調整がみられる。15-6は小口隅部残欠で、端に糸のほつれをふせぐためにまつた痕跡が明らかであり、一枚造りの好例と思われる。前縁、側縁とも2面取りされ、唯一明灰色で軽い。淡褐色（15-3、5、7、16-3）表面墨灰色（16-2～4）がある。

そのほかに繩巻板による叩しめが施された一群がある。繩目にも荒いわら繩状（16-5）から撚糸状（17-3）までみられるが、概して後者の方がしまりが良いようである。また17-3は表面の細布目が櫛状のかきへらで再調整され、縁は2面取りとなる。図の上方に向けてわずかに開き気味で、或いは桶巻造であろうか。色調は淡褐色である。17-5は極細布目がへらでナデ消され、灰色を呈す。他は中目でねじれを生じておりくすんだ淡褐色となる。

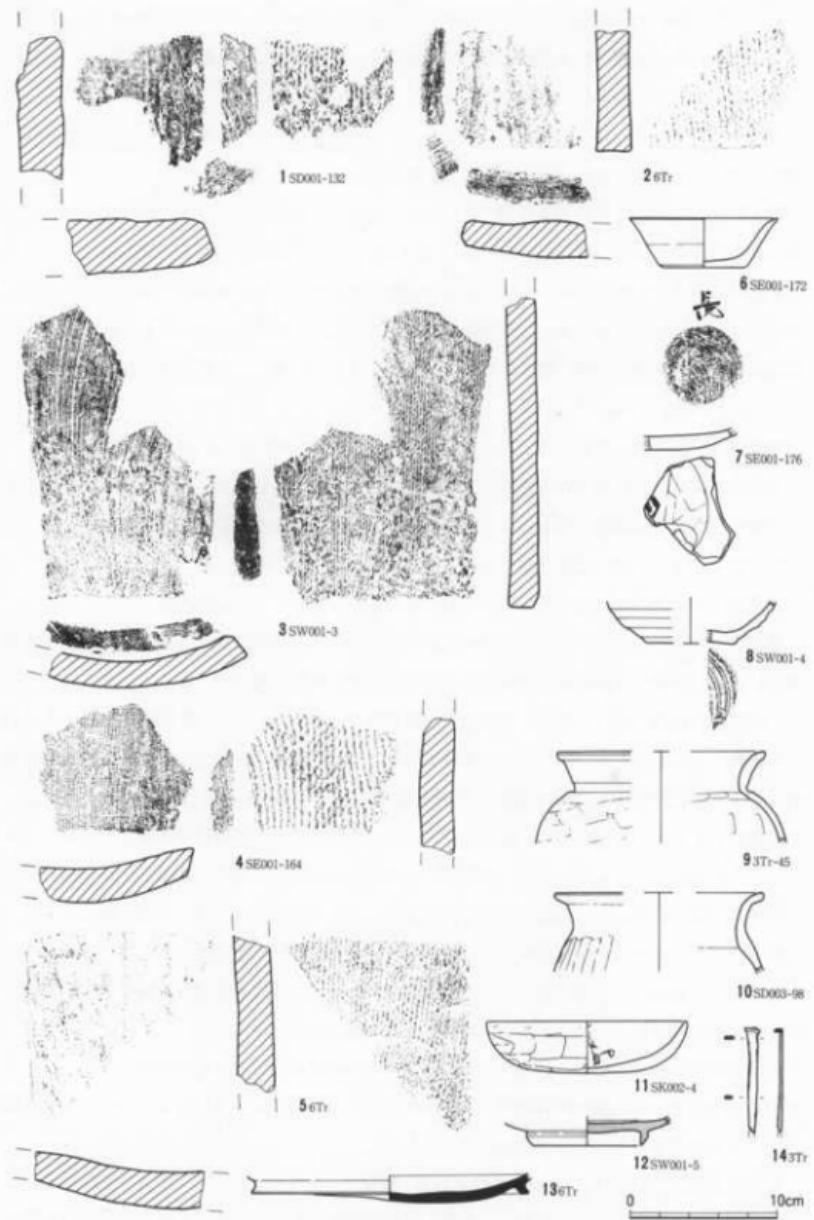
**隅平瓦**（17-1・2） ともに前縁・側縁の交差部分をほぼ45°にカットしている。前縁は無調整、隅部は切離し、側縁は3面取りと微妙に異なる。ともに繩目で、表は布目をへらナデされ、側縁から25mm内側（↑部分）に粘土板の接合痕をみることができ、桶巻造の特徴を示す。

**その他**（6～14） 6はロクロ土師器杯で器高3.3、口径10、底部5.5cmを測る。体部は直線的に立上がり口縁わずかに開く。底部は回転糸切離しのち周縁をヘラナデする。底中央に「長」の墨書がみられた。淡褐色、密で焼きも良いが、全体にカワラケ質の感がある。8も同じく杯片で、体部に強いロクロ目が残る。底径は6.0cmで回転糸切離し後調整されない。明褐色、やや密で焼成良好である。7は蓋によくにた形の盤か、ロクロ成形後底切はヘラ削り調整のまま、内面はナデつけられ、一部に灯明芯痕がみられる。褐色、粗目で焼きは良い。

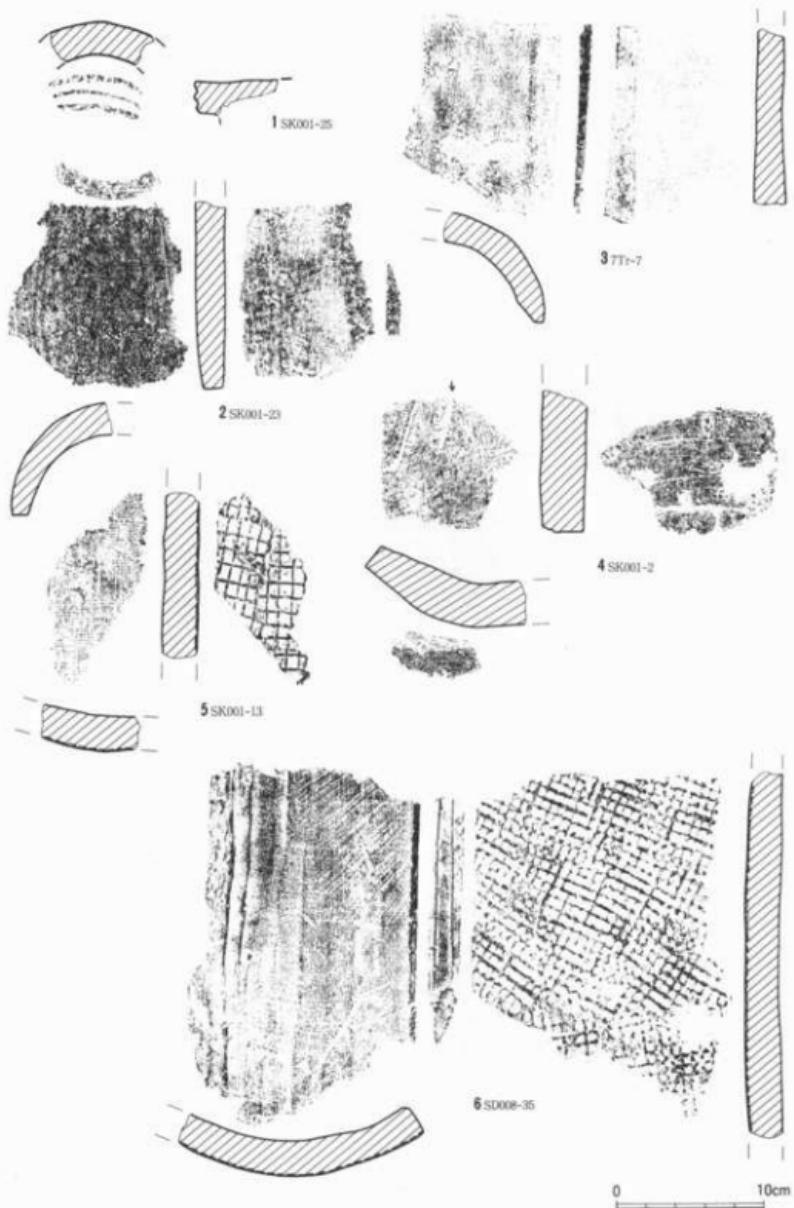
9・10は土師器の小形甕に属す。口径14cm強で、共に口縁で大きく開く。胴は球形で横ヘラナデ、寸胴でヘラ削りの違いがある。暗褐色、やや粗く焼きは良い。

13は須恵器盤の高台部で径19.0cmを計る。ふんぱりのある貼付け高台で回転ヘラ削りの底部は下方に突き出す。内面は布か指頭ナデで調整されるが、器面はざらざらしている。内面濃灰色、外は淡灰色を呈し、粗いが焼成は良好である。

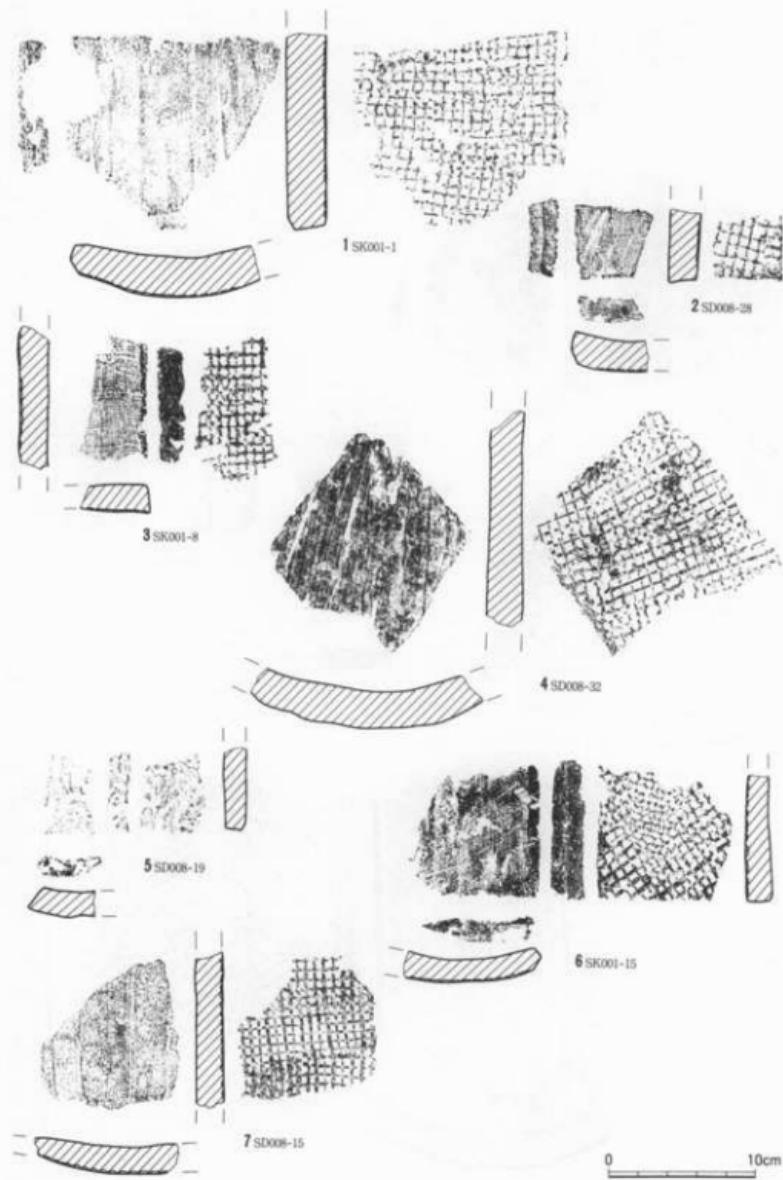
12は灰釉陶器高台皿で径7.4cm、高台は底唇、側縁ともシャープにできており、貼付けてあることがわかる。底部は回転ヘラ削り、内面には重ね焼きの痕がのこり、それより外方のみ施釉される。淡灰色で、わずかに長石粒を含む。



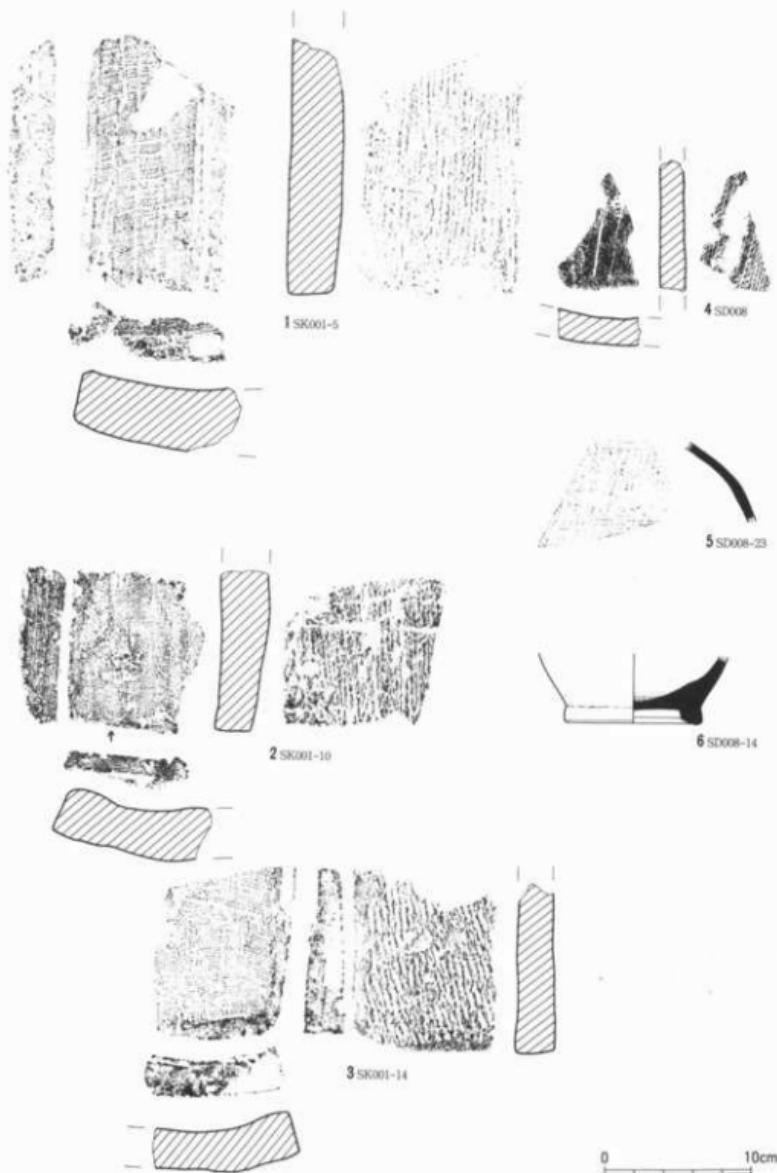
第17図 2区出土遺物(5)



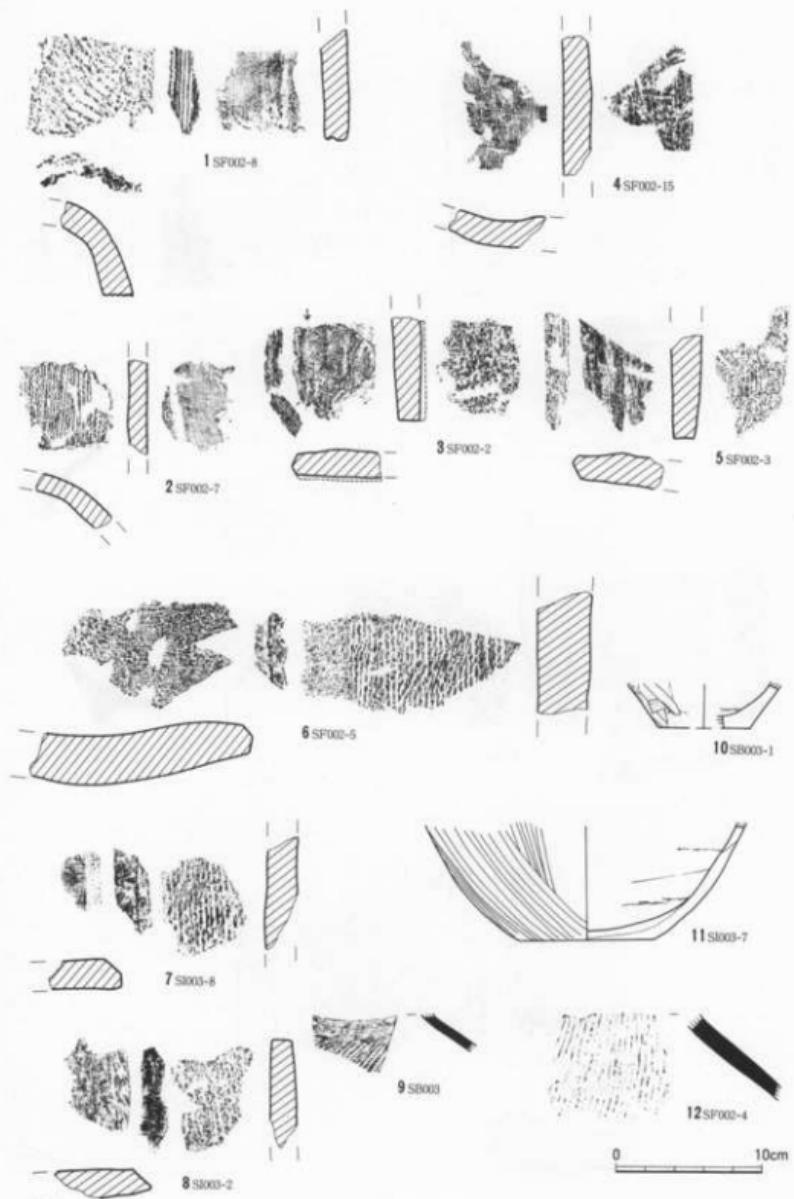
第18図 3区出土遺物(1)



第19図 3区出土遺物(2)



第20図 3区出土遺物(3)



第21図 4区出土遺物

14は頭を打ちまげられた平たい角釘で7cmほどが残る。

### c 3 区 (第18図～第20図)

**軒丸瓦 (18-1)** 周縁帶のみ残る。圓線は2条認められ、稜線は山形で鋭い。内側の推定径が10cm、ほぼ同径の内区と接合していたもので、丸瓦の部分は徐々に盛り上がるようである。淡褐色を呈す。

**丸瓦 (18-2・3)** 2は重合部で厚さ13cm、丁寧に削られ、加熱の痕跡がある。裏面は布目の痕をナデ消される。色調は褐色。3の分割面も同じ細工がなされ、裏面の布目は斜方向にねじれている。器表面は淡灰色で、断面は淡褐色を示す。

**平瓦 (18-4～6、19-1～7、20-1～4)** 18-4のみ叩目がなく、横位に幅広のへらナデが施され、表面の布目も周縁で削りとられている。布の継ぎ目(↓印)から右は目が斜めにみられ、前縁にはかききずが残り全体に荒い造りである。灰色で軽い。

格子叩目のうち非常に似かよった一群(18-6、19-1・6)は、斜格子、重ね格子などの違いや側縁の細工に差があるが、格子目(ほぼ7mm)布目とかきへら調整に共通性があり、淡褐色を呈す。布目痕を表全面かき削りされたもの(19-4・7)や、軒面との接合部分と考えられるもの(18-5)などがある。

次に繩目瓦であるが、粗い燃糸状の繩目が施され、表は中細布目で、部厚な一群がある。19-1・2は粘土板の継ぎ目(↑印)がみられ、表面は凹凸が著しく、ともに淡黄灰色、同じく3は赤褐色となる。

**その他 (20-5・6)** 5は須恵器甕、肩部片で、叩目を横ナデで埋め、2条沈線をめぐらしている。濃灰色、密でやや焼きがあまい。6は長頸瓶底部である。高台径9.4cmで台底面は内傾し、本体底部は平坦である。同下半は直線的に立上がり、全体に褐色の発色がみられる。内面には径6cmほどの範囲に降灰釉が付着し、器内は部厚く微密で灰色を呈す。

### 2 御堂跡 (第21図)

御堂跡から出土した瓦は細片を含めほとんどすべてが繩目によるものである。

**丸瓦 (1・2)** 1は荒い斜繩目でしまりが悪い。中央付近は極端に弯曲し、分割面には先割れへらの痕が付く。裏面は細布目で、一部ナデ調整される。極細の布目はねじれを起こしているのが明瞭である。ともに淡褐色となる。

**平瓦 (4～8)** 5点とも燃糸状の比較的細かい繩目で、いずれも判然としない。裏面は4の他はかなり粗い布目でほとんどナデ消されたものが多い。側縁は極端に2面取りされ、5に至っては表面を大きく削り取っている。7には布の合わせ目が、8では継ぎ目の痕が明らかである。薄造りばかりの中では6は3cmと部厚く、淡灰色を呈す。褐色(4・5)、淡黄色(7・8)となる。

隅平瓦（3） 左隅を60°ほどの角度で切ったもので、他地区と同様前縁無調整、側縁面取りし、隅は切離しとなる。荒い布目を丁寧にナデ消しており、裏は剥落する。また側端に粘土板の接合痕（↓印）が残る。灰色呈し軽い。

その他（9～12） 9は須恵器壺の肩部で斜めの叩きがそのまま残り、内面には抑えに使用した工具痕が丸くいくつかみられる。灰色、密で焼成は良い。12は黒褐色を呈す大甕片で叩目が明瞭である。器肉は厚く、淡褐色を呈す。

10は土師器小形甕で底径6.1cm、外全面縦横のヘラ削りを施す。部厚く内面は明褐色である。11は大形の甕で底径9.0cm、胴、底ともに斜方向の強い磨き調整される。底部内面に粘土を二重に貼り合わせている様子がよくわかり、胎土に鉱物粒が多く含まれ、内面は暗黄色を呈す。所謂常総型のものである。

## Vまとめ

八日市場市大寺廃寺跡については、古くからその存在が知られており、和銅2年（709）創建と伝えられる竜尾寺と結び付けて語られることが多いが、寺域や伽藍配置などその実態を把握することのできる証左は皆無といってよい。今回の調査では地形的にも瓦の散布状況からも、最も可能性の高い地点を選択できたことは意義深い。

調査地は北から東へ35度ほどずれた東西60m南北70mの四角形の平坦面で、各トレンチもその地形に沿うように設定した。制約された用地内での確認調査のため、古代寺院跡に直接関わるであろう遺構の追求にはおのずから限界があったが、以下遺構の性格および時期についてまとめて簡単に触れておく。

SB001と呼んだ遺構のうちでP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は明らかに柱穴であり、径30cmの柱痕や堅く築き固められた裏込めはかなりの規模の建物が想像される。問題は配列が余りにも不規則で柱間も一定せず、方向までも不明なことである。これはSB002でも全く同じことが言えるが、柱穴内から瓦片が出土したことから瓦葺建物が存在した時期に接するか、そう隔りのない頃の掘立柱建物の痕跡と考えることもできよう。

SW001は東辺がかろうじて検出できたに過ぎないが一辺13m、南北より西へ30度ずれた基軸の版築された基壇様の高まりであることが判明した。構築の際には基礎となる面に区画を表わす溝を設けているようである。その溝内から出土した土師器杯（17-8）は9世紀末期の所産と思われ、構築解明の手懸りとなろう。

溝跡のうちで大きさ形態など近似するのはSD003、008である。幅約1.5mの断面箱形を呈し、ともに3～5度北にふれるがほぼ東西に平行し、その間隔は54mである。なお同規模のSD005は西へ3度ほどずれて南北に走る溝である。SD003は8世紀前半に比定される住居跡（SI001）

を切って作られ、またSD008内からは長頸瓶が出土した。SD003と005が交差すると思われる地点は基壇が構築されており、溝跡の検出面であるソフトローム上面にまで調査が及ばず断定はできないが、あるいは8世紀代の寺域を画する溝であった可能性も否定できない。

調査区から出土した遺物で原位置を保っているものは一つもなく、遺跡全体に散在している状況から遺構の時期を決定する資料とはならない。とくに瓦の年代観は把えにくいが、若干紹介しておく。

12-1は素縁単弁蓮華文の軒丸瓦で、昭和51年に予備調査を実施した多古台遺跡<sup>(注1)</sup>出土のものと酷似している。13-1は子葉をもつ八弁単弁蓮華文であり、他に三重圓縁の破片がみられる。いずれも8世紀中頃と考えて大過なく、その時期にこれらを載せた本瓦葺きの建物が存在したことは間違いない、SB001もその一つであった可能性が強い。

平瓦のうちで一枚造りと判断したのは15-6のみである。出土したなかでも全体を復元できるものは1点もないが、いずれもかなり丸味をもち小振りである。また布の合せ目で布目が交差したり、櫛の織目痕と思われる凹凸のある例がみられることから櫛巻造りのものが主流であると思われる<sup>(注2)</sup>。

御堂跡からは明確な掘立柱建物跡(SB003)が検出された。配列から考えて極めて企画的な3間2間以上の建物と思われ、地名からして堂宇であったことは想像に難くない。P<sub>3</sub>内から7世紀末から8世紀初めに比定される土師器小形壺(21-10)が出土した。またこの建物の上にSF002が走っているが、多数の瓦とともに9世紀代の大壺片がみられる。すなわちこの建物は8世紀代に建立し9世紀中頃までには廃絶されたことがわかる。

遺跡全体に瓦の散布がみられるが、非常に稀薄である。今回の調査でもSF002下から求められた瓦のほかには10数点採集できたに留まる。御堂跡の瓦の特徴は織目に限られ、丸瓦の場合も表面無調整であること、大寺廃寺跡のものより薄手小振りである点などがあげられよう<sup>(注3)</sup>。この瓦はSB003の所産と考えるのが妥当であるが、量的にみても屋根全体を葺きつめられていたことは考えられず、わずかに軒を飾った程度の建物であったろう。

大寺地区には東方の御堂跡のほか、西方に大寺出羽遺跡<sup>(注4)</sup>があり、布目格子叩きの瓦が採集され、北方の大寺遺跡にも平瓦が認められるという<sup>(注5)</sup>。また竜尾寺のすぐ西側台地上に金光寺廃寺があったと伝えられる<sup>(注6)</sup>。これらは大寺廃寺跡を中心に半径650mの範囲に分布する。今回の調査で創建時と判定できる遺構はなかったが、奈良時代のある時期に掘立柱の堂がそびえ立つ姿が思い起こされる。

(注1) 千葉県立房総風土記の丘「房総の古瓦」(昭和53年) 所収。

(注2) 森 郁夫「瓦」考古学ライブラリー43 ニューサイエンス社 (昭和61年) 住田正一・

内藤政恒「古瓦」學生社（昭和43年）を参考とした。

(注3) 「八日市場市史」の御堂跡廃寺の項（西山太郎筆）にも同趣の記がみられる。

(注4) 前出

(注5) 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』昭和61年

(注6) 八日市場市教育委員会藤崎宏道氏によれば、瓦の散布は認められないとのことである。

# 写 真 図 版





1. 大寺廃寺跡全景（北側）



2. 同 全景（東側）



1. 1 Tr 拡張区  
遺構検出状況



2. SB001 P1 上  
軒丸瓦出土状況



3. 同断面

2区



1. 4 Tr  
遺構検出状況



2. 4 Tr 拡張区  
遺構検出状況



3. SD003・SI001



1. SB002 P2  
瓦出土状況



2. SD001・SD002  
瓦出土状況



3. SE001  
土師器出土状況



1. SW001・SF001



2. SW001 南サブトレンチ断面

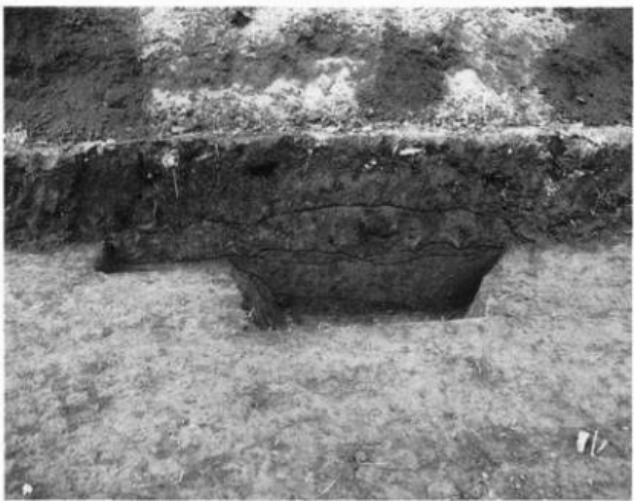
2区



1. SW001  
東サブトレンチ  
断面



2. 同 同  
遺物出土状況



3. 同  
北サブトレンチ  
断面



1. SD005  
SD006  
SD007



2. SK002  
断面



3. SK001  
瓦出土状況



1. 御堂跡全景（北側）



2. SB003



1. SB003 P5  
断面



2. 同 P6  
断面



3. SF002  
遺物出土状況

## 遺物（軒丸瓦）



12-1



13-1



13-2



18-1

## (土器)



12-5



17-6



20-6

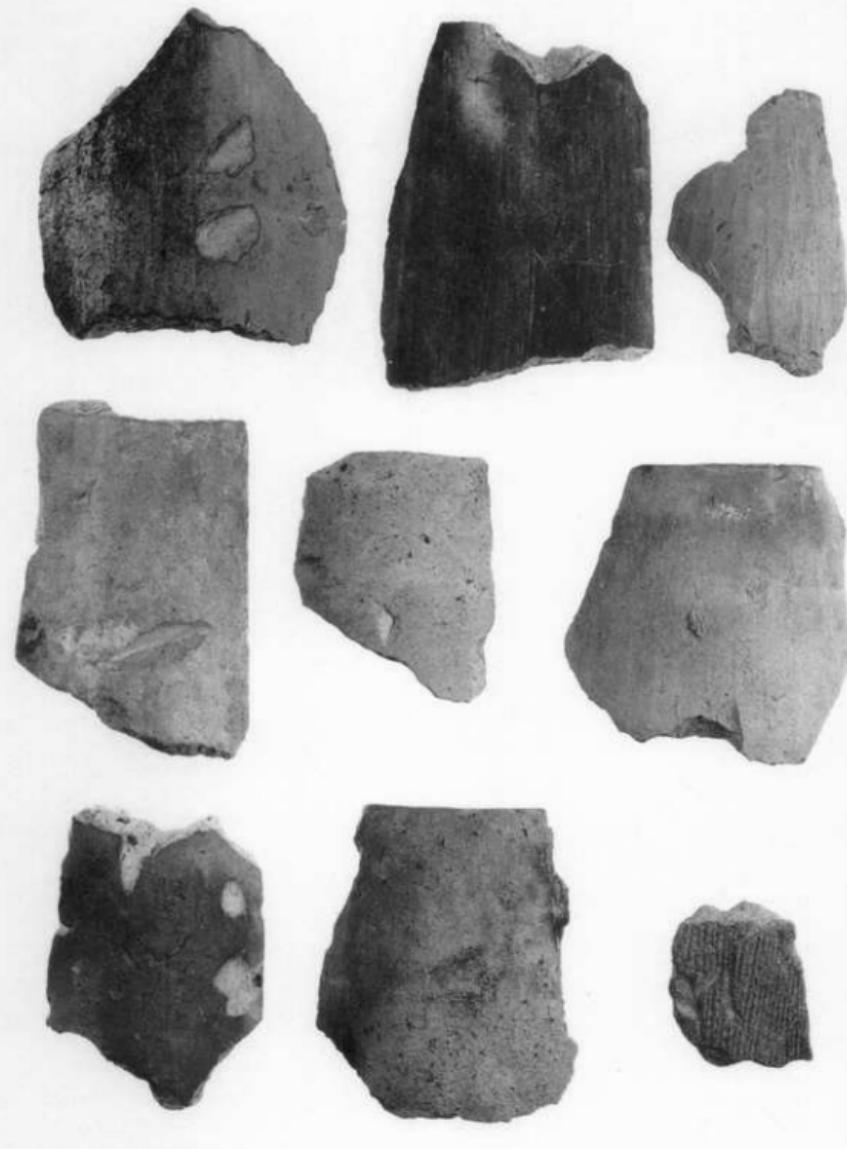


17-12



17-13

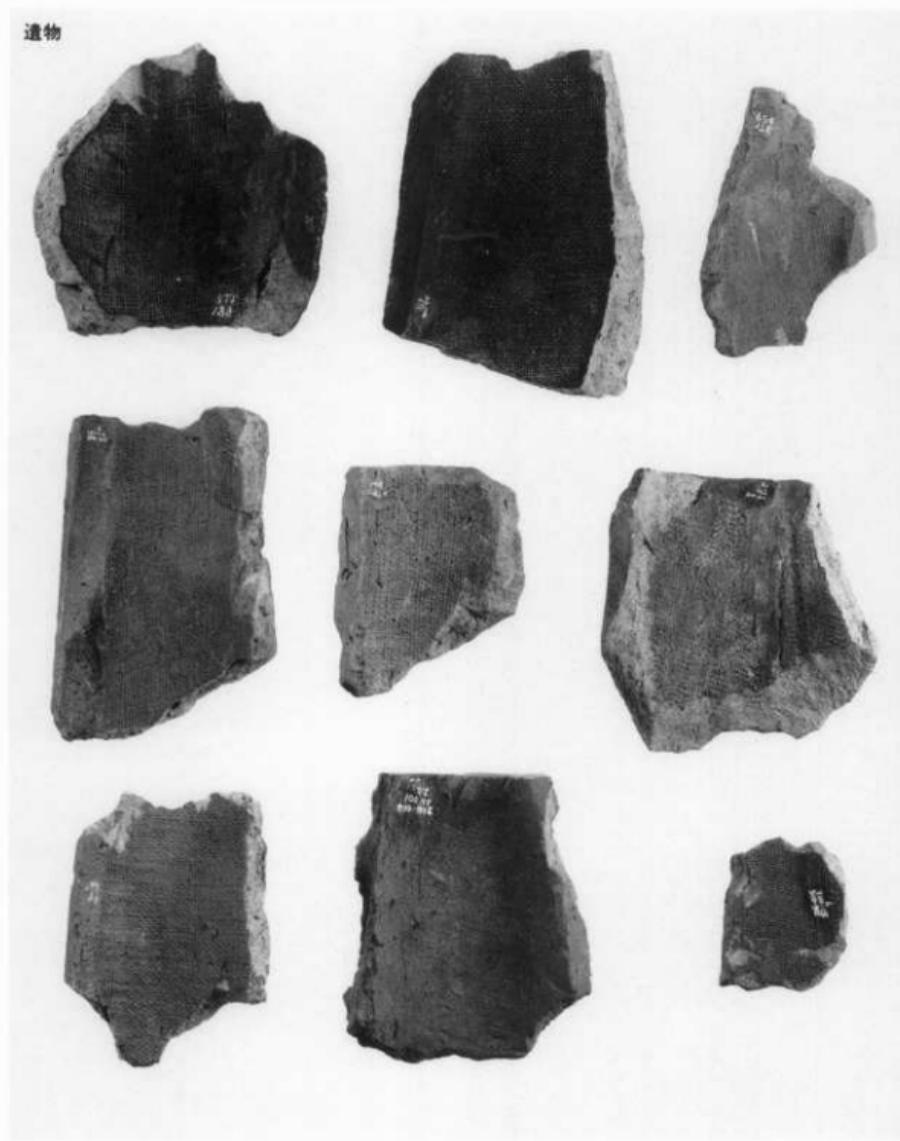
遺物



(瓦瓦(表))

14-3	15-1	14-4
18-3	14-5	14-6
14-2	18-2	21-2

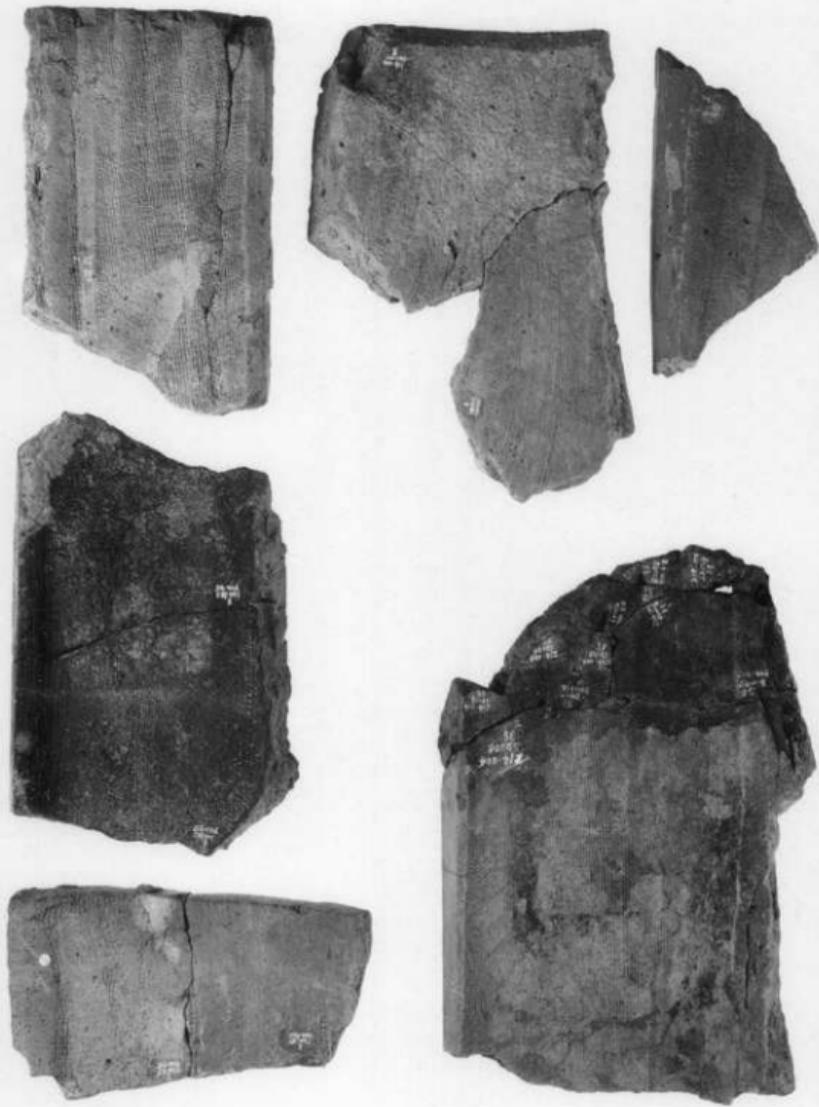
遺物



(丸瓦(裏))

14-3	15-1	14-4
18-3	14-5	14-6
14-2	18-2	21-2

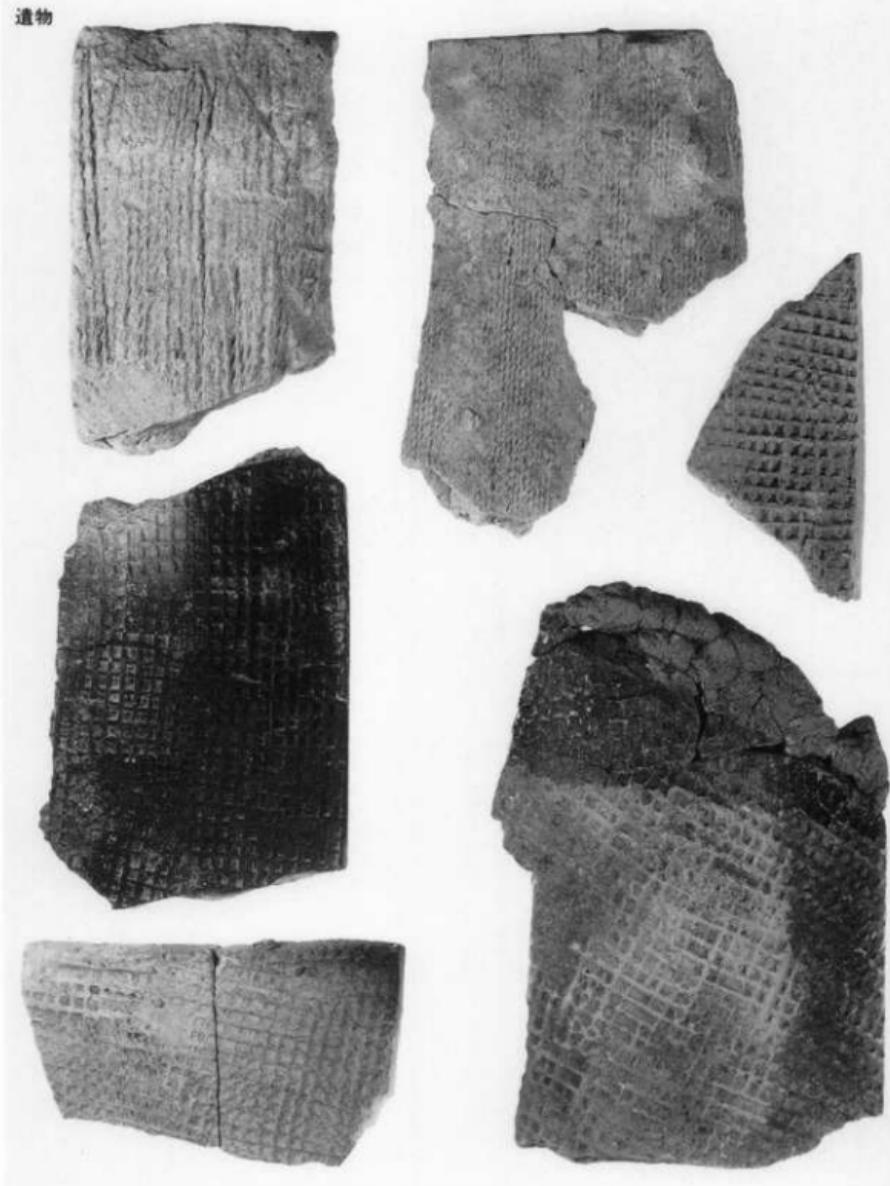
遺物



(平瓦(表))

20-1	17-3	12-2
16-2	18-6	
16-3		

遺物



(平瓦(裏))

20-1	17-3	12-2
16-2	18-6	
16-3		

千葉県文化財センター調査報告第184集  
八日市場市大寺廃寺跡確認調査報告書

---

平成2年3月31日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社  
千葉市都町2丁目5番5号

---

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て  
増刷したものです。